

ドイツ文学におけるロマン理論 の研究 (VI)

——ヴィーラントの生涯と作品——

谷 崎 英 男

はじめに

前稿において、啓蒙主義時代の特徴をあげ、そのロマンとしてロビンソン風物語と市民的教訓的センチメンタルロマンについて述べた。今回は啓蒙主義ロマンの頂点に立つヴィーラントを主として取り上げてみたい。

(1) ヴィーラントの生涯と作品

ホルスト・リュエディガー編の『ドイツ文学史』の『啓蒙主義からシュトルム・ウント・ドラング』の項の執筆者であるゲルハルト・カイザーは「クロップシュトックが18世紀のドイツの叙情詩を、レッスィングが演劇を初めて価値のある結果へ導いたように、ドイツの叙事詩を通用させたのはヴィーラントであった。クロップシュトックの変ることのない巧妙な手ぎわとレッスィングの方向をしっかりと定めた自己形成とは反対に、ヴィーラントは紆余曲折を経てやっと自分に帰るのである」と書いている⁽¹⁾が、ヴィーラントほどその評価をめぐって毀誉褒貶の著しい作家も珍しいであろう。1794年に42巻にもなるヴィーラントの全集が、それも廉価版や大型八つ折り版や豪華版などさまざまな形で発行され始めたとき、ヴィーラントは当時のドイツにおける最も有名な作家

と見なされていた。彼の名声は全ヨーロッパで驚嘆をもって迎えられ、ゲーテやシラーもその栄誉の陰に隠れていたほどであった。例えば『シノペのディオゲネスの対話』(Die Dialoge des Diogenes von Sinope) が1770年に単行本として出版されたとき、5版も増刷され、それに海賊版もいくつか発行された。さらに外国語への翻訳も英語に4、フランス語に11、オランダ語に1、イタリア語に2、ポーランド語に2、ロシア語に1、ハンガリア語に4、合計25の翻訳が出版されており、慎重に調べてみてこの著作の全流布数はおおよそ3万5千から4万冊になると考えても差支えないであろう。3,000部の限界を越えることはまれであったという当時の平均的な発行部数を考えれば、ヴィーラントがこの時代にどんな意味をもっていたかは、明らかである。1830年頃でもまだヴィーラントは、ドイツで一番よく読まれる著者の一人であった。しかしこの時代の文学へのヴィーラントの影響は微々たるものであった。そしてそれに続く数十年間にヴィーラントの名声は急速に色あせた。彼の文学作品についての知識は、もはや一部の愛好家と専門家の小さなサークルの中にだけに限られていた。

それらの人達の中にはゴットフリート・ケラー (Gottfried Keller) (1819-1890)、ヘルマン・ヘッセ (Hermann Hesse) (1877-1962)、トーマス・マン (Thomas Mann) (1875-1955) のような一流の作家が含まれているが、この状況は今日に至っても大して変わっていない。『ヴィーラント』(1949年)の著者フリードリヒ・ゼングレ (Friedrich Sengle) がヴィーラントを研究のテーマとしたとき、この「非ドイツ的、非キリスト教的、非道徳的」作家を研究するのを不思議に思った知人が多かったといわれている。^[2] このようなヴィーラントが過小評価された原因を作ったものは、とりわけロマン派の人達の責任であるとされてきた。シュレーゲル兄弟が、その雑誌『アテネウム』(Athenäum)の中で、ヴィーラントを独自の文学的功績をなしとげず、材料やモチーフや問題の提起をもっぱら世界文学の中から寄せ集めてきて自分自身体験したこと

ないことを自分のことのように書く人 (Anempfnder) と呼んだからである。しかしながらその原因はもっと深い所にあるであろう。写実的な描写の代りにしばしば登場するヴィーラント好みの知的な議論 (性格の代りに意見が紹介される)、古代の歴史への数多くの神話的なえん曲な表現と風刺 (古代の歴史の知識がなければ、ヴィーラントの関心事の中には、不可解なままであるものがあるに違いない)、時代と共に過去のものとなり、時代を超越した争いとは認められない多くの問題を取りあげていること、簡潔さと澄んだ透明さよりも細かく長ったらしく描写するのが向いている文体——こういったものがヴィーラントの作品の影響が時代を越えて及ぶのに不利な要因なのである。彼の作品の大部分はもはやただ歴史的にのみ関心を引くものといえるであろう。それでもヴィーラントの注目すべき豊富な思想、言語の優雅さ、完べきな造形力によって今日でも生命を保っているかなりの部分は、そのまま生命を保ち続けるであろう。というのは、ゲーテがヴィーラントに捧げた弔辞「ヴィーラントの友愛の思い出のために」(Zu brüderlichem Andenken Wielands) の中の次の美しい言葉は、今でも妥当なものとしてみなされるからである。「人間と作家は、彼の心の中で完全に混ざり合っていた。彼は生きている人間として詩作し、詩作しながら生活した。」(Mensch und Schriftsteller hatten sich in ihm ganz durchdrungen, er dichtete als Lebender und lebte dichtend.) 「というのは彼の詩的ならびに文学的努力は、直接人生に向けられていたからである。たとえ彼が常に必ずしも実際のな目的を求めたのではなくても、彼は常に遠くあるいは近くに実際のな目標を念頭から離さなかったのである。」(Denn sein dichterisches sowie sein literarisches Streben war unmittelbar aufs Leben gerichtet, und wenn er auch nicht gerade immer einen praktischen Zweck suchte, ein praktisches Ziel hatte er doch immer nah oder fern vor Augen.)^[3]

ヴィーラントは、1733年9月5日に帝国直属自由都市であるビーベラッハの

領地に属していたシュヴァーベンの村オーバーホルツハイムで生れた。ビーベラッハは、現在ではウムルからボーデン湖畔にあるフリードリヒスハーフェンに至る鉄道沿線にあり、当時は上層市民階級が支配していた全部で50あった帝国直属自由都市の一つで、宗教改革後は部分的にプロテスタントになり、旧教徒と新教徒とは反目し合っていた。そして約50の大小さまざまな王国と侯国（その中ではプロイセンとオーストリアがもっとも重要な存在であった）と、およそ80の教会領と100以上の帝国直参の伯爵領と一緒にあって、帝国直属自由都市は、神聖ローマ帝国(Das Heilige Römische Reich Deutscher Nation)を形成していた。その首長である皇帝はウィーンに居住していたが、その権力とはいえば、ほとんど称号以上のものは存在していなかったのである。ウィーラントの祖先は、200年以上も前から職人としてビーベラッハで生活し、その系譜からは、市参事会員や市長や新教の牧師などが輩出していた。ウィーラントの父親もプロテスタントの牧師で、敬虔主義の精神の中で教育を受けており、母親は飾りけのない市民階級出身の婦人であった。従って少年ウィーラントは、市民階級的な自意識と寛容な信仰心にみちみちた零屈気の中で成長したのである。そしてウィーラントが3歳になったとき、父親はビーベラッハへ転任となり、ここで時のたつにつれて新教の最高の聖職者の地位までのぼった。

さてウィーラントは、すでに4歳の時からまず父親から、ついで学校で教育を受けた。とりわけラテン語に力を入れたので、8歳の時に完全にラテン語をマスターし、12歳の時にはラテン語の韻文を書き、16歳では重要なローマの著述のすべてを原文で読んだといわれている。そのほかは、ギリシャ語、ヘブライ語、数学、論理学、歴史、図画、宗教が授業時間表にのっていた。14歳の時にウィーラントは、マグデブルク近郊の全寮制学校クロースターベルゲンに入学し、ここでフランス語を学び、近代科学精神の普及者であったフォントネル(Bernard Le Bouvier de Fontenelle)(1657-1757)からヴォルテールに至るまでのフランス啓蒙主義の重要な作品を学び取った。なにかんづく影響を受けた

のはピエール・ペール (Pierre Bayle) (1647-1706) の『歴史批評辞典』(Dictionnaire historique et critique) (1695-97) であった。この作品の1740年の最新版は41年から44年までゴットシェートによって独訳されていたが、当時の知識題材を総括し、上昇する市民階級で解釈したものである。ヨーロッパの啓蒙主義運動のこのような大要を知ることによって、ヴィーラントは古代の思想に全く新しい展望を開き、現在を克服するに際して古代が重要な思想と刺激の無尽蔵の貯蔵庫として示唆に富んでいることを発見した。直接の個人的な影響としては、ペールによってデモクリトスやエピクロスやルクレティウスなどの地球の成立についての唯物的な理論を知ったことがあげられる。このような理論的助けを借りてヴィーラントは、幼少時代の敬虔主義的な信仰から解放されたのである。この読書の結果として16歳になったヴィーラントは、論文を書き、その中でヴィーナスが海のあわから生れたのは原子の運動によってだけであることを明らかにした。しかしこの解説が発見されると、この異端児は敬虔主義の学校からあやうく追放の憂き目を見そうになったのである。

1749年にヴィーラントは、哲学の勉強を仕上げるために、エルフルトのおじヨハン・ヴィルヘルム・バウマーの所へ行った。バウマーはもともと聖職者であったが、世界観的な理由でこの職業を放棄して、自然科学に取り組んでいた。ヴィーラントが翌年帰宅したときには、父親を説いて神学の勉強をしないでよいことを認めさせた。1751年に18歳でテュービンゲンの法律の学生であったときに、ヴィーラントは最初の作品である教訓詩『諸物の本性』(Die Natur der Dinge) を発表した。これはルクレティウスの同名の哲学的教訓詩『諸物の本性について』(De rerum natura) の中の唯物論的な解釈との対決でもあり、また神学と敬虔主義との対決でもあり、唯物論的な見解と観念論的な見解が独特な方法で一つの哲学的な体系へと結合されている。この教訓詩は2歳年上で、その前年にヴィーラントが知り合いたいとのゾフィー・フォン・グーターマンの励ましによって生れたものであった。その後まもなくして二人は婚約した

が、1753年にゾフィーは、マインツの選帝侯国の官房長の秘書であったゲオルク・ミヒャエル・フォン・ラロシュと結婚するためにその婚約を解消した。ゾフィー・フォン・ラロシュのことについては前稿で述べた所である。

この恋愛体験は、ヴィーラントにとって決定的な意味をもった事件であった。彼は「愛の崇高な力」が「原子の偶然な運動」によって成立することはありえないことであると考えることによって、機械論的な唯物論に背を向け、それ以後当時の進歩的な啓蒙主義哲学であった理神論 (Deismus) を信奉するようになったのである。理神論によれば、神は確かに世界を創造したが、それ以上のいかなる干渉をも控えているので、神による被造物は自分自身に内在する法則に従って発展しこの法則を認識することが科学と哲学の任務であると考えるのである。このような理性の観点から、ヴィーラントは神学にも批判の目を向けた。すなわち神はヴィーラントにとって人類の幸福を目標とした一個の哲学的な原理となり、聖書の創造の教えや、来世の神秘論や、教会や宗派や神の子キリストによる仲介の機能、さらには神の摂理なども、すべてこの原理と両立しえないものとして拒否されるのである。

1752年には、ヴィーラントは文学に専心するために哲学の研究を放棄し、いわゆるスイス派 (Die Schweizer) の文芸批評家であったボードマー (J. J. Bodmer) (1698-1783) の招待を受けてチューリヒへおもむいた。1740年から60年にかけて、スイス派はゴットシェート (J. C. Gottsched) のライプツィヒ派 (Die Leipziger) との文芸上の論争に入るが、ヴィーラントはその一方に結びつくことによって、自分の才能の向上を期待したのである。ヴィーラントの考えによると、真の文学に対するボードマーの美的見解は、ゴットシェートのそれよりも身近なものに感ぜられた。しかしながら当時54歳であった師ボードマーの強い宗教指向と道徳献身の個性は、ヴィーラントに余りにも強烈な影響を与え、当時の作品の一つである叙事詩『一キリスト教徒の心情』 (Empfindungen eines Christen) には、『最新文学に関する書簡』 (Briefe, die neueste

Literatur betreffend) の中でレッスィングによって「ヴィーラント氏は、自分が『諸物の本性』の著者であることを、ずっと前から自分の記憶から抹殺したがつているようだ」とか「ヴィーラント氏は、ふた言めにはキリスト教の宗教を口にする」とか厳しい批判が加えられた。ヴィーラントは、ボードマーの家庭で主人役のために間断なく著作上の世話をしながら、ほぼ20ヶ月を過したが、内面的にも外面的にも徐々にボードマーから離れて行くようになった。ボードマーからの離反に役立ったのはシャフツベリーとシェイクスピアの研究とスイスの医者で哲学の著作もあるツィンマーマン (J. G. Zimmermann) との交友であった。

1754年から59年までチューリッヒで、1759年から60年までベルンで家庭教師として、ヴィーラントは生計を立てた。ここで彼は市民階級の楽しい社交的な仲間の間に入出入りし、彼本来の気質——ゲーテは、ヴィーラントの生れつきの才能について「人をひきつける社交家」(angenehmer Gesellschafter) であると語っている——がのびのびと開かれることになった。ヴィーラントは、自宅で有名なサークルを開いていた才気あふれる女性であったジュリー・ボンデリと知り合いになったが、ヴィーラントが1760年の4月にビーベラッハへ定住することになり、スイスへ帰ることが不可能になって、彼女との婚約も解消された。

1758年から62年にかけて、チューリッヒのゲスナー社からヴィーラントの最初の6巻本の全集が出版された。しかしヴィーラント自身は1760年までの自分の作品は不完全なものであるとし、後年になってからは明確に次に来るすぐれた業績のための準備段階であると評価している。そして前述のように1760年の4月30日に、ヴィーラントは故郷である帝国直属自由都市であったビーベラッハへ市参事会員として招かれ、7月には官房長の役についた。名誉ある官職と十分な俸給と文筆活動にとってたっぷりある余暇は、これで保証されたように思われた。が他方では実際的な市の役人としての活動のおかげで、人生経験

が豊富になり、社会構造に対する重要な理解もえられるようになった。それとともに旧教徒と新教徒が反目しあっていたビーベラッハでは、俗物主義や視野の狭い根性や不寛容な精神を余す所なく思い知ったのである。

そしてこのような俗物主義の雰囲気嫌いがさすと、しばしば近くにあるヴァルトハウゼンの館へ逃避した。ここには1761年以来ヴィーラントが「立派な政治家であり、芸術の愛好者」と呼んでいたシュターディオ伯爵が隠退生活を送っていた。伯爵はマインツの聖職者と激しい論争を行って啓蒙主義の理念を実現しようと試みたり、工業を興したり、見本市を開いて貿易を促進したり、中世以来の宗教的な狂信主義と戦った人であった。

伯爵の随員の中には、ラロシュ夫妻もあり、ラロシュ夫妻を通じてヴィーラントは、明るい社交性や機智に富んだ会話、生の享受や陽気さが主流をなすサークルへ近づくことができた。またここで大きな社交界に対する認識をもえたのである。

一方ヴィーラントの個人的な面でも、結婚という大きな問題が発生した。1761年の5月に、28歳になったヴィーラントは、クリスティーネ・ハーゲルというやっと20歳になるかならないかの庶民階級自身の女性と知り合いになり、その優雅さと飾り気のなさに夢中になった。ヴィーラントは、1763年の11月25日と26日のツィンマーマンにあてた手紙の中で「こんなに本当に心から愛したことは、これまでに一度もなかった」ことを告白している。しかしながら結婚へのあらゆる努力は挫折した。ヴィーラント側では身分上の違いから、ハーゲル側では信仰上の違いから、周囲の反対を押し切ることはできなかったのである。1765年の10月に、ヴィーラントと親戚の選んだアウクスブルクの都市貴族の娘であったアンナ・ドロテア・ヒレンブラントとの婚姻が成立した。彼女はヴィーラントが手紙の中で書いている所によると、「無邪気で、実社会の波にもまれていない、極めて愉快的人間」で、はじめのうちはこの結婚に懐疑的であったヴィーラントも、彼女との生活によって幸せを見出した。まれに見る

ような和合と一点の影のない融和の中でこの結婚は36年も続き、14人もの子供が生まれ、彼女は家庭の安らぎの中心となったのである。

さてこのような新しい人生経験は、1760年以降質を新たにして始まるヴィーラントの創作活動への基礎を作ることになり、彼は今や芸術の新領域を征服し、ドイツ文学のその後の発展に決定的な影響を与える作品を作り出すことに成功したのである。この時期の活動として特に挙げられる3つのタイトルは、シェイクスピアの戯曲の翻訳と、ロマン『アーガトン物語』(Geschichte des Agathon)と韻文物語『ムザリーオン』(Musalion)である。このうち22のシェイクスピアの戯曲は、1762年から66年にかけてヴィーラントの翻訳が8巻本で出版された。これはシェイクスピアのドイツ語への最初の意味深い翻訳で、LESSINGやゲーテやシラーによって称賛された。ドイツ国民文学のモデルを求めていたヴィーラントは、シェイクスピアに行き当たり、シェイクスピアの中に「人間性についての深い知識」を発見し、「人間の心をシェイクスピアほど知り、かつ明るみに出した人はほとんどいないし」また「彼ほど自然を多種多様な場面において、多くの真実をもって描いた人はほとんどいない」(1766年の翻訳への後記)とほめたたえている。ヴィーラントは、『真夏の夜の夢』までは、シェイクスピアの戯曲を散文で翻訳していた。そして部分的にはいくつかの場面を縮めたり、時には内容だけを挙げたり、二三の場面を拡大したりしていた。このようなことは、当時としては普通に行われていた方法で、ゲーテも前述の『思い出のために』の中で、外国の詩人を自国へ移し、いわば併合したようなものだといって、ヴィーラントを擁護している。しかしながらシュトルム・ウント・ドラングの作家たちは、シェイクスピアの全人を、その深い悲劇性とすばらしい喜劇性という広大な視野の中で把握しておらず、偉大な人物を並の道徳的人物に格下げしてしまったといって、ヴィーラントを非難したのである。なおヴィーラントの翻訳としては、このほかにローマの詩人ホラティウスと後期ギリシャの風刺作家ルキアノスの翻訳がある。

1759 年以来考想が練られ、66 年から 67 年にかけて 2 部に分れて出版された『アーガトン物語』は、ドイツのロマンの形成にとってもっとも重要な作品であり、これによってドイツにおける「教養および発展ロマン」(Bildungs-und Entwicklungsroman) が確立されたことは、周知の事実で、これについては後で触れるであろう。『グラツィア (優美の女神) の哲学』(Die Philosophie der Grazien) (1768 年) という副題をもつ韻文物語『ムザーリオン』も『アーガトン物語』と同じくギリシャに題材を求めた作品である。女友達のムザーリオン』との衝突によって、ファーニスはまじめな研究と厳格な瞑想に没頭した生活を送るために、アテネの近くの田舎の領地に引込む。ムザーリオンは、ファーニと和解しようとしてやってくるが、ファーニスはストア派のクレアントとピュタゴラス派のテオフロンという二人の友人の哲学者に寄り所を求める。クレアントは、単に感覚的で、物質の意のままになるすべての物に対する無関心を説き、テオフロンはそれに反して、感覚性を通じてのみ美の原型は、経験可能であると主張する。

しかしながら美しいムザーリオンにとっては、ファーニスの精神的寄り所であるこの二人の哲学者を動揺させることは、容易である。クレアントは、ムザーリオンの美しい手によってすすめられた甘美なワインに負けてしまい、テオフロンは、美しいムザーリオンの召使いの魅力にたちまちとりこになってしまう。そしてファーニスもついに禁欲主義を捨て、ムザーリオンの腕の中で哲学を忘れるために、夜彼女の寝床へと忍びよるのである。

愛だったのだ——愛ほど上手に教えてくれる人があるだろうか。

彼 (ファーニス) も喜んで速やかに、苦勞もせずに魅力のある哲学を学んだのだ。

それは自然と運命がわれわれに与えてくれるものを

楽しく味わい、ほかの残りはなくても平気だ。

この世の事物を美しい面から見、運命に喜んで従い、

ゼウスが慈愛の気持から謎めいた夜にわれわれの目から隠したものが一体何なのかも知ろうとしないし、
地獄の善人たちにも、どんな愚かものであっても決して腹を立てることもなく、
ただ滑稽だと思っただけであり、
だからといって彼らへの愛情がへる訳ではなく、迷える人達を気の毒に思い、
ただ偽善者だけはさけるのだ。
いつも美德の話ばかりしている訳ではなく、美德の話をしたからといって熱中することもない。
しかし報酬も求めずに趣味で美德を行っている。
そして幸せであろうとなかろうと、この世を楽園とも地獄とも思わず、
道学者先生が七階の王座から見下しているほど、墮落しているとも思わないし、
青二才の詩人たちが酒とデュリス（トラキヴの王女、恋のために自殺した）に夢中になったときに描くほど楽しいものとも思わない。

(Die Liebe war's.— Wer lehrt so gut wie sie?
Auch lernt' er gern nnd schnell und sonder Müh
Die reizende Philosophie,
Die, was Natur und Schicksal uns gewährt,
Vergnügt geneißt und gern den Rest entbehrt;
Die Dinge dieser Welt gern von der schönen Seite
Betrachtet, dem Geschick sich unterwürfig macht,
Nicht wissen will, was alles das bedeute,
Was Zeus aus Huld in rätselhafte Nacht
Vor uns verbarg, und auf die guten Leute
Der Unterwelt, so sehr sie Toren sind,
Nie böse wird, nur lächerlich sie findt
Und sich dazu, sie drum nicht minder liebet,

Den Irrenden bedauert und nur den Gleisner flieht;
Nicht stets von Tugend spricht, noch, von ihr sprechend, glüht,
Doch ohne Sold und aus Geschmack sie übet;
Und glücklich oder nicht, die Welt
Für kein Elysium, für keine Hölle hält,
Nie so verderbt, als sie der Sittenrichter
Von seinem Thron — im sechsten Stockwerk sieht,
So lustig nie, als jugendliche Dichter
Sie malen, wenn ihr Hirn von Wein und Phyllis glüht.)

ヴィーラントは、このようにうたって、晴れやかな生の享樂の理想と、理性と衝動、喜びと節度、優雅と満足がそれぞれ調和した理想を説くのである。『ムザーリオン』は発売と同時に好評を博し、翌年にはもう第二版が必要になるほどであった。初期の讃美者の中にはゲーテが含まれており、ゲーテは『詩と真実』の第二部第七章において「疑いもなくヴィーラントこそ、これらのすべての人々のあいだで最もすばらしい素質をもっていた。……かれの輝かしい作品の多くは、ちょうどわたくしの大学時代にあらわれている。なかでも最もわたくしに影響を及ぼしたのは『ムザーリオン』であって、エーザー（ライプツィヒの美術学校長）が分けてくれた最初の刷り見本で見たその個所は、今でもなお思い出することができる。古代が生き返って、新たにふたたび眼前にある思いがしたのは、まさにその個所であった。ヴィーラントの天才における彫塑的なものは、すべてそこに無類の完全さで示されている」と述べている。

なおこの時期に発売されたヴィーラントの作品としては『熱狂に対する自然の勝利、またはドン・スィルビオの冒険』（1764年）と『滑稽物語』（Komische Erzählungen）（1765年）がある。前者はセルバンテスの『ドン・キホーテ』にならってスペインを舞台にした作品であらゆる熱狂に対する風刺になっている。またフランスの騎士物語や妖精主役のおとぎ話のパロディーの役割も果している。以下簡単にその筋を追ってみよう。

物語はまだ全く妖精の世界にとりこになっていて、その夢のような愛を見出そうとして冒険の旅に出発したが、こと志と違って現実の愛の幸福を手に入れるある若いスペインの貴族の物語である。

バレンシャ地方の古いくずれかかったロサルバ城の中で、早くから両親を失って孤児になったドン・スィルビオは、おばのドンナ・メンシアによって昔風の騎士物語の気風の中で教育を受けていた。しかし彼は、おばの知らない所でその空想を妖精のおとぎ話を読むことで満足させ、世間から隔絶した環境の中で、おとぎ話の世界が全く真実の世界であるかのように考えていたのである。ある日のこと、一匹の美しい青い蝶が彼の目にとまった。その蝶は彼の手からのがれていったが、その際にかわいらしい女の羊飼いの肖像のついた高価な首飾り用のロケットを発見する。ドン・スィルビオはたちまち、この女性への愛に燃え上がり、おしゃべりではあるが忠実な農家の少年である召使いのペドリリョに、妖精のラディアンテが現われて、次のような真実を確認してくれたことを物語る。すなわちドン・スィルビオの恋する女性は、ラディアンテに敵意をもつ妖精のファンフェルルーチェによって魔法をかけられて青い蝶になったある王女だというのである。ドン・スィルビオは、この王女を魔法から解放して自分のものにする決意を伝える。

けれどもおばのドンナ・メンシアは、おいのドン・スィルビオに対しては、全く違った魂胆を抱いていた。彼女自身近くの町のセルバの老管理財人のサンチェスと結婚する積りで、そのためにスィルビオを、サンチェスの金持ちではあるが、醜い愚か者のめいのマルヘリーナと結婚させようとしていた。スィルビオは、夜陰に乗じてこの恥ずべきもくろみからのがれるために、父親譲りの剣を帯び、ペドリリョと愛犬ティンティを連れて逃走する。逃走中にかれらは多くの不愉快な目に会うが、スィルビオはそれらはすべて敵意をもつ妖精のスィルフィデンやグノーメンやサラマンデルのせいにしてしまう。ある朝のこと、かれらは一人のジプシーの老婆に出会い、このジプシーと一緒にティンティも

突然姿が見えなくなった。翌朝ペドリヨは二人のチャーミングで華やかに着飾った女の羊飾いを認めたが、二人は明らかにうっとりとして眠っている若い主人のドン・スィルビオの姿を見つめている様子だったが、それから立ち去っていった。

さらに旅を続けるうちに、ドン・スィルビオとペドリヨの二人は、貴族たちの小ぜり合いに巻き込まれ、弱い方の組に加担して勝利を決定的なものにする。この貴族——若い方はドン・エウヘーニョといい、年取った方はドン・ガブリエルという名前であったが——は、若い美しい女性であるドンナ・ハスィンテを連れてきていた。みんなは一緒に近くの旅館に一泊する。しかしスィルビオは、かれのロケットに何かのたくらみがなされているのではないかと思い、未明にペドリヨを連れて逃げ出すが、この日のうちに肖像をなくしてしまう。さらに青い蝶を探し求めるうちに、二人はとうとう心を奪うほど美しい公園を通過して、ある豪壮な別荘の広間にやってきて、ここで再び二人の女の羊飼いに会ったが、一方の女性はロケットの肖像にあきれるほどよく似ており、またもう一人の女はその侍女のように見受けられたが、ペドリヨはすぐさま彼女に夢中になった。

ところでドンナ・フェリシアは、もちろんスィルビオが考えていたような妖精ではなく、若くて途方もない金持ちで、うっとりするほど美しい未亡人で、たまたま侍女のラウラと一緒にこの兄のリリアス城を訪れていた所であった。そしてこの兄というのは、つまり前に出たドン・エウヘーニョで、かれの愛するハスィンテと友人のドン・ガブリエルを連れて、間もなくそこに到着する。これらはかつて自分を助けてくれた人たちとの再会を喜び、好ましい客として迎える。

このような付き合いの中で、ハスィンテはその波瀾にみちた生涯の話、たとえば子供の時に年老いたジブシーの女に教育され、ダンスや歌を教え込まれたこと、その後このジブシー女がセルビアで売春婦としてこき使おうとしたが、

逃げて女優になったことなどを物語った。ドン・エウヘーニョは、グラナダで女優のかの女を見付け出し、その後かれの城へ招待したのであった。

ドン・スィルビオの妖精の王女に対する愛情は、フェリシアを見るたびにますます動揺した。フェリシアの方も、かれを熱烈に愛していて、かれが競争相手と思い込んでいる王女から彼を最終的に引き離そうと努める。その際にドン・ガブリエルが手助けをしてくれ、かれは妖精の世界を茶化すために「ビリビンカー王子の童話」という話を作り上げ、馬鹿げたとるに足らない妖精の物語を物語るのである。そうこうするうちに、ラウラは、自分に夢中になっているペドリリョと共に、女主人のフェリシアが昔なくしたロケットを取り戻す。フェリシアは驚くスィルビオにそれが祖母の若いときの肖像であることを説明し、それによって夢のような愛情は、またしても激しいショックを受けるのである。

その時突然ドンナ・メンスィアがおいのスィルビオをドンナ・メルヘリーナの所へ連れ戻す意図をもって現われ、みんなを驚かせる。その後すぐにペドリリョは年老いたジプシー女を犬のティンティと一緒にみんなの前へ連れてくる。かの女は、ハスィンテの育ての母であることを明らかにし、ハスィンテが5歳の時に行方不明になったドン・スィルビオの妹であるドンナ・セラフィである証拠をもたらし、これによってかの女はエウヘーニョにふさわしい身分のものとなり、結局リラスで三組の結婚と三組の幸せなカップルが誕生したのである。

『熱狂に対する自然の勝利』という題名がすでに示しているように、過度のおとぎ話の読書によって精神をゆがめられた熱狂的な若者が、おとぎ話に出てくる王女だと思い込んだ女性の肖像にさそわれてお供を連れて冒険の旅に出るが、友人たちによってその妄想から目を覚まし、本物の花嫁を獲得するという訳である。一見して騎士物語の世界を現実と錯覚して、サンチェスというお供を連れて旅に出たドン・キホーテのパロディであることは明らかであるが、ヴィーラント自身そのスイス滞在中に感傷主義的な時代思潮の影響の下で、熱狂

的な理念崇拜を体験し、それを克服したことは前に述べた通りである。ヴィーラントは、若き熱狂家が明るい現実指向の生活態度と対決する過程を、70年代に始まる彼の文学製作の中心テーマにすえたのである。この点でヴィーラントにもっとも多くの影響を与えたのは、イギリスの哲学者シャフツベリー (Ashley-Cooper Shaftesbury) (1671-1713) であった。ロックの門下生であったシャフツベリーは、熱狂 (enthusiasm) の中に迷信と集団妄想およびあらゆる種類の社会悪の主観的な前提条件を認め、その予防手段として、社会的寛容の基礎の上に立って冗談とからかいと上機嫌によって迷妄から目覚めさせることをすすめている⁽⁴⁾。ヴィーラント自身もシャフツベリーの精神に沿って友人であるスイスの詩人ゲスナー (Salomon Geßner) (1730-1788) にあてて、次のように書いている。

「熱狂と迷信は、その影響力を人間生活のあらゆる部門に広がります。両者は、熱狂が人間の能動的な部分に根ざし、迷信が人間の受動的な部分に根ざしていることによって、人間には生来のものです。冗談と皮肉は、つねに熱狂と迷信が脱落するのを防ぐ最良の手段と見なされてきました。ドン・スィルビオの物語も、その表題が暗示する よに、こういう意図の下に書かれたのです」(1763年11月7日の手紙)

著作の読者への影響やそれによって引き起される現実の美化という『ドン・スィルビオの冒険』で取り上げたテーマは、ヴィーラントによって、他の作品でも多種多様な変容した形で取り扱われているが、次に問題になる『アーガトン物語』に関連して考えると、『アーガトン物語』の中では、問題を心理的に解明し、より円熟した経験の段階で新しい論議を試みているが、『ドン・スィルビオの冒険』では、心理的な発展は大幅に捨てて、喜劇的な外面的手段によって同じ中心テーマの風刺的な変種を作り出しているということができよう。従ってフリードリヒ・ゼングレは、『ドン・スィルビオ』を教養小説と呼び、『アーガトン物語』の前触れとしており、フリードリヒ・バイスナーは「発展

小説のジャンルにおけるいちばん最初の試み」としているが、『ドン・スィルビオ』には、まだバロック・ロマンの残滓が多く残されていて、全面的には首肯しえないであろう。

次に『滑稽物語』は、ビーペラハで隣りに住んでいたシュターディオン伯爵のために書いた古代に題材を取った韻文物語で、ドイツ語にはそれまでなかった軽快さ、音楽性、優美さをもった洒脱で軽妙で官能的なスタイルを編み出したが、道学者からはその浮薄さを非難され、市町村の中には、「ヴィーラントの最近の作品は、良俗にとって大部分けしからぬもので、危険である」という理由で、本屋がヴィーラントの作品を置かないようにという警察の命令を受けていた所もあり、1772年にはクロップシュトックの熱烈な崇拜者の集まりであったゲッティンゲン森林同盟 (Göttinger Hainbund) の若者たちは、ヴィーラントの肖像を「風俗を墮落させる人」として焼いたりしたのである。

次にヴィーラントが自らその主著 (Hauptwerk) と呼んだ『アーガトン物語』に移ろう。『アーガトン物語』の最初の構想は、前述のように1959年にまでさかのぼる。1762年の1月5日にヴィーラントはビーペラハから友人のヨハン・ゲオルク・ツィンマーマンにあてて「それでも私は『アーガトン物語』と名付けた長篇小説を、数ヶ月前に書き始めました。私はこの中で、アーガトンが置かれた環境があると私が想像するような私自身を描きます」と書いている。しかしながら仕事は遅々として進まず、8月27日になってやっと、チューリヒのゲスナー出版社は、最初の4巻の原稿を受け取った。友人たちの熱狂的な賞讃に励まされて、1763年の5月21日には、出版契約が調印され、8月5日に最初の6巻がそろい、印刷が始まった。しかしながら、その後はシェイクスピアの翻訳や『滑稽物語』や『ドン・スィルビオ』に時間を取られ、筆がなかなか進まなかった。65年の7月になってやっと、再び執筆に取り掛り、66年の初めに、第1部 (7巻まで) の原稿が完成し、イースターの頃に『アーガトン物語』第1部が出版された。9月にはヴィーラントは、続編に着手し、67年のイースタ

ーには、第 2 部が印刷された。

1768年からは、フィリップ・エスラムス・ライヒがヴィーラントの出版社になり、1773年のイースターの頃に、文体の上で手を加えた『アーガトン物語』の第 2 稿が発行された。ヴィーラントは、別に 1 章と序言『アーガトンにおける歴史性について』(Über das Historische im Agathon) (この中でヴィーラントは、『アーガトン物語』を歴史小説と見なさないように、明確に警告している) ならびに第 2 部で予告ずみの『ダーナエの物語』(Geschichte der Danae) を追加している。

1793年の 9 月に、ヴィーラントは、ゲオルク・ヨーアヒム・ゲッセンによる最終版の全編のために『アーガトン物語』の改訂に取り掛かった。翌年 4 月半ばに原稿は完成し、ズィラクースの獄中でのヒピアスとアーガトンの間の会談と、長い間の懸案であった結末としての『アルヒュータスの人生哲学』(Lebensweisheit des Archytas) が新たにつけ加えられた。そして 94 年の秋にこの第 3 稿が全集の 1 巻から 3 巻までの形で発表された。このように『アーガトン物語』には、三つの稿があってその最初の構想がねられた 1759 年から、最後の第 3 稿が出版された 94 年まで 35 年の年月が経過しており、ヴィーラント自身がその主著と呼んだのもうなずけなくはない。

以下その大筋をたどってみよう。物語は主人公アーガトン(ギリシャ語で「善良な男」を意味する)が森の中で道に迷って、日没とともに泉のせせらぎを聞きながら眠り込む場面から始まっているが、あとで物語られるところによると、アーガトンはデルフィで幸福な少年時代を送り、プシュヒーユ(ギリシャ語で「魂」の意)という心の友をもっていた。のちにアテネへ移り共和国のために尽力するが、彼をねたむ者の陰謀によって、名誉と財産を奪われてアテネから追放され、オリエントへの旅に出発し、今この森の中で道に迷うのである。このようにこのロマンは舞台を古代ギリシャとしており、同時代のイギリスのフィールドイング(H. Fielding) (1707-1754) の『トム・ジョーンズ』(The

History of Tom Jones, a Foundling) (1749 年) やフランスのクレビヨン・フィス (C. P. J. de Cr billon) (1707-1777) の『心と精神の迷い』(Les Egarements du coeur et de l'esprit) (1736-38) では、その舞台をすべて当時の現実の市民社会に取っているのとは、全く対照的である。アーガトンが眠りを楽しんでたが、突然トラキア (古代ギリシャの北部地方) 人の女達のはめをはずしたバックスのお祭の騒音によって目を覚まさせられる。アーガトンはすばらしい美男子であったので、その美しさは酒に酔った女たちを驚かせ、興奮した女たちは彼の回りをよるめきながら踊ったり、自分たちの神が眼前に現われたと思ひ込んで、馬鹿げた身ぶりですの喜びを表わしている。だがその時ギリキア (小アジアの地中海沿岸にあった古代国家) の海賊が襲ってきて、バックスの祭りを祝っている人たちはもちろん、アーガトンをも船で連れさり、奴隷市場へと運んで行く。海賊船の上で思いもかけずアーガトンは、同じように海賊の手に落ちていたデルフィ時代の恋人ブシューヒェに出会う。愛し合う二人は、お互にその運命を話し合うが、たちまち離別の運命を味わなければならない。アーガトンとトラキアの女たちと数人の若い奴隷たちは、スミルナの奴隷市場へ運ぶために、別の小船にのせられるのである。ブシューヒェと別れなければならないという考えは、アーガトンを逆上させ、ギリキア人の足下にひれ伏して懇願したが、何の役にも立たなかった。こうしてアーガトンはスミルナ (エーゲ海に面したトルコ西部の港湾都市) の奴隷市場へ運ばれ、ここで金持ちのソフィストのヒピアスによって買われる。そしてヒピアスはアーガトンを自分の弟子として後継者に仕立てあげようとする。今やカリヤス (ギリシャ語で「美しい人」の意) という名前に改名されたアーガトンは、けれどもソフィスト達に論難を加えたプラトンの教義を信奉していたので、ヒピアスの説得に抵抗する。(ヴィーラント自身の言葉によれば、ソフィスト達は、他人の情熱を刺激する術を教え、ソクラテスは自己の情熱を抑制する術を教え、前者は賢明で徳高いふりをするためには、どうしなければならないかを教え、後者は実

際にどうしたら賢明で徳高くなれるかを教える」と書いている。)そして最後には興奮して「あなたは、美德や倫理的な完璧さを幻想だと断言されます。……私はあなたの英知の立派な説得とあなたの原則や実例が保証するすべての利点に対して反抗します。……美德は常に夢想であって欲しいものです。この夢想が私を幸せにするのです。そしてすべての人間を幸せにし、全地球を天国にすることでしょう」といい切るのである。

ヒピアスは自分の説得が何の実りもないのを知り、カリアスに別の試練を与えるアイディアを思い付く。古代ギリシャにはヘタイラと称する教養があって政治家ともつきあいのある一種の高級娼婦がいたが、その一人で魅力的な美人であるダーナエに、女の力によって「美德は自然の反対でなければならない」と思い込んでいる若者を正道にもどしてくれるように頼む。ダーナエは承知して、貞節で心のこもった女になりすましてカリアスを恋人にしようとする。カリアスも、ダーナエの魅力に屈し、「あなたに会って以来、あなたに会うことより大きな幸福を知りません」というまでになり、一方ダーナエも彼に対する本物の深い愛情にとらえられて、全く変った人間になる。しかしながらこの愛の牧歌的情景も、自分の試みの失敗をさとしたヒピアスがカリアスにダーナエのいかがわしい過去のことを打ち明けることによって終息する。「もう終りだ、美德は仕返しを受けたのだ」と叫び、ヒピアスに向って「あなたは、友情という晴れやかな仮面をつけながら、毒の入ったあいくちで私を刺したのだ」という言葉を投げつけ、軽蔑のまなこをあわてふためくヒピアスに浴びせながら、その場を立ち去る。自暴自棄になったカリアスは、再びアーガトンになってミルナから逃げ出して、シシリア島の都市国家シラクサへと旅立つ。

当時シラクサを支配していたのは、専制的支配者であったディオニュージウスである。アーガトンは、シラクサでアテネ時代からの知人であるキュレネ派の哲学者アリスティップに出会い、彼の手引きでディオニュージウスの宮廷に紹介され、王の愛顧をえて政務の指揮をまかされる。アーガトンは、2年

のあいだディオニュージウスの政治を支え、その改善に努力する。そしてシラクーサの国民によって恩人として尊敬されるが、宮廷の寄生虫のような悪い取りまき達にとっては、憎悪の対象になる。さらに宮廷をめぐる陰謀にもまきこまれ、逮捕される破目におち入り、ひどく人間不信の気持をいだくようになる。その時思いもかけずに、ヒピアスがアーガトンの独房に現われて、あらためてスミルナで自分の後継者になってくれるように申し出るが、アーガトンは「永遠に真実で正しく良いこと」にもっと密接に結びついている自分の本心を打ち明けて、その申し出をことわる。

イタリアの東南部の港湾都市ターラントでは、アーガトンの父親ストラニクスの友人であったアルヒタスが支配していたが、彼の強いとりなしでアーガトンは釈放されて、彼の家に迎えらる。そして意外にもアルヒタスの息子の嫁になっているプシューヒェに再会し、青春時代の恋人プシューヒェが実際に死んだと思われていた妹であることあることを知る。ターラントに落ちてから、アーガトンは数学や自然科学や天文学などに専心し、また狩りに出かける。ある時嵐に襲われ、人里離れた別荘に難をさける。そしてこの家の持主が、今はカリクレアという名前になっているダーナエであることを知り、アーガトンはダーナエの足元にひれ伏し、言葉では表現できないような気持で彼女のひざを抱き、涙にむせぶ顔つきでかの女の前にひざまずくのである。ダーナエは、アルヒタスの家族ともひきあわされ、思いやりのある友情も生れてくるのである。以上が第1稿の大筋であるが、第2稿ではダーナエがプシューヒェに誠実に物語る愛の遍歴の歴史『ダーナエの物語』が、第3稿では『アルヒタスの人生哲学』がつけ加えられたことは前述の通りである。ヴィーラントは、序言の中で「われわれの計画によると、われわれの主人公の性格がいろいろの試練にかけられ、その試練によって彼の考え方と美德が浄化され、その中で過大で不純なものがしだいに分離させられる」(Weil nach unserm Plan der Charakter unsers Helden auf verschiedene Proben gestellt werden sollte, durch

welche seine Denkart und seine Tugend erläutert und dasjenige, was darin übertrieben und unecht war, nach und nach abgesondert würde) と述べ、さらに「われわれがさしあたって物語の展開についていうことができるすべてのことは、次のようなことである。すなわちアーガトンは、この作品の終着点をなす彼の人生の最後の時期に、賢明でもあるとともに、高潔な人間になるだろうということである。」(Alles, was wir vorläufig von der Entwicklung sagen können, ist dieses: daß Agathon in der letzten Periode seines Lebens, welche den Beschluß unsers Werkes macht, ein ebenso weiser als tugendhafter Mann sein wird) と述べている。

一般にドイツにおいて「教養小説」(Bildungsroman)という言葉は、ヴィルヘルム・ディルタイ (Wilhelm Dilthey) (1833-1911) によって、ゲーテの『ヴィルヘルム・マイスターの修業時代』とその系列に属する小説群に対して用いられたとされているが、最近の研究によると、ディルタイ以前にカルル・モルゲンシュテルンがすでに使用していることが明らかになっている。⁽⁵⁾ モルゲンシュテルンの定義によると「教養小説というのは、次のような二つの条件があれば、そうよんでも差支えないであろう。それは主人公の人間形成を、その始まりとある段階までの完成の発展の中で描くのであるから、第一にもっぱらその題材のためである。しかしながらまた第二にそれはこの描写によって読者の人間形成を、他のいかなる種類の小説よりも広範囲に促進するためである」(Bildungsroman wird er heißen, erstens und vorzüglich wegen seines Stoffs, weil er des Helden Bildung in ihrem Anfang und Fortgang bis zu einer gewissen Stufe der Vollendung darstellt; zweytens aber auch, weil er gerade durch diese Darstellung des Lesers Bildung, in weitem Umfange als jede andere Art des Romans fördert.) とされている。⁽⁶⁾ ディルタイは、その著『体験と文学』(Das Erlebnis und die Dichtung) (1905年) のヘルダーリンを論じた文の中で「『ヒュペーリオン』は、ルソーの影響をう

けて、内面的教化を目ざす当時のわれわれの精神の方向よりドイツに生れた教養小説の一つである。これらのうちにおいて、ゲーテとジャン・パウル以後、ティークの『シュテルンバルト』、ノヴァーリスの『オフトーディンゲン』、ヘルダーリンの『ヒュペリオン』は長き文学的価値を維持した。『ヴィルヘルム・マイスター』と『ヘスペルス』以来、これらの小説はすべて当時の青年を描写したものであった。青年は幸福なる黎明期に生の第一歩を踏み出し、同志を求め、友情と恋愛に遭遇する。しかしやがてはこの世の無情なる現実と戦い、かくして多様な生活経験のうちに成熟し、自己みずからを見出し、この世におけるみずからの使命を確信するのである」⁷⁾と、教養小説に定義のようなものを与えている。『アーガトン物語』が教養小説であるかどうかについては、様々な議論や説があって今ここに立ち入る余裕はないが、ディルタイのように『ヴィルヘルム・マイスター』以降のものに適用したものでなく、モルゲンシュテルンのような広い意味で適用すれば、教養小説といってよいであろう。げんにディルタイは、同じ文の別の所でヘルダーリンがテュービンゲン時代に着手した『ヒュペリオン』について「ヘルダーリンは、いまやヴィーランドの『アーガトン』以来われわれの文学において慣例になっている発展史的小説の使命をもって臨んだ。しかもかれは発展小説なるものをシラーの視点の下に解した。すなわちその出発点は単純なる組織によって与えられる素朴な完全さであり、その究極点はわれわれみずからが最高の教養によって達しえられる理想である。この間をかれの主人公ヒュペリオンの数奇なる行路が走るのである」と述べ、『アーガトン物語』が教養小説の系列に属することをほのめかしている。

『ドイツの教養小説』(Der deutsche Bildungsroman) (1984年)の著者ロルフ・ゼルプマンも18世紀のシュンメル『ドイツ感傷旅行』(Empfindsame Reisen durch Deutschland) (1771-72)、フォン・クニッゲの『ペーター・クラウゼン物語』(Geschichte Peter Clausens) (1783-85)やヘグラートの『滑

稽物語』(Komischer Roman) (1786 年) などの教養小説ではないが、主人公の教養物語 (Bildungsgeschichte) を提供する作品をあげ、ヴィーランドの『アーガトン物語』に至って初めてまとまった長篇小説の主題になったとしている^[8]。

もう一点つけ加えておきたいことは、『アーガトン物語』における小説技法の新しさである。物語の大筋は前に述べた通りであるが、その中には「海賊のモチーフ」や「昔の恋人が妹であることが判明する」ことなど、バロック小説を思わせる古めかしさも見られるし、哲学的論議やギリシャ事情についての注釈や *Abschweifung* とか *Digression* と称する本題から逸脱した話がちりばめられていて、全体は複雑な構造になっている。すなわち物語は、ストーリー全部と登場人物すべてを見晴らす上位の視点からコメントを加えながら物語に割り込んでくる全知全能の語り手^[9] (*auktorialer Erzähler*) によって物語られる。この語り手は、すべてを知りつくした語り手の役割で登場するが、「この物語はある古いギリシャの手記から抜き取ったものである」と主張することで、物語にある種の距離を保つ。このような作者としてのフィクションは、古代ギリシャで演ぜられる物語が、読者と同時代人である語り手によって報告されることを可能にするのである。

そしてこのことと密接に関連するのは、語り手にとって目の出来事を報告することよりも、むしろ事件についての注釈や観察や反省の方が大切であるということである。これによって、語り手は絶えず意識的に読者に向けて話しかけていることが明白になる。ヴィーランドは、物語を話すだけでなく、読者に物語をできる限り多面的に提供するために、あらゆる点で語り手の立場を利用するのである。その意味でノルベルト・ミラーの言葉を借りるならば、「ヴィーランドとともにドイツ文学においては、われわれの意味における長篇小説、すなわち、すべての構成の法則と文体上の手段が計画的に利用され、物語の中で映し出されている意識的な芸術形態としての長篇小説が始まった」^[10] という

ことができよう。

この『アーガトン物語』が当時のドイツの文学に対してもつ意味は、ただちに認められ、すでに1767年に同じ世代に属する LESSING は、その『ハンブルク演劇論』(Hamburgische Dramaturgie) (1767-69) の中でこの作品が「疑いもなく、われわれの世紀でもっとも優れた作品の一つである」(第69節)と賞讃し、またクリスティアン・ブランケンブルク (C. Blankenburg) (1744-96) は、この『アーガトン物語』を拠り所として『ロマン試論』(Versuch über den Roman) (1774年) を書き、叙事詩に代る新しいジャンルとしてのロマンの地位を確立したが、このことについては後に詳しく触れるであろう。

さて1760年以来ヴィーラントはビーペラハに定住していたが、ほとんど社交的な交際もなく、文学的な環境からも遠ざけられていて、この小都会での俗物根性的な雰囲気は年をへるごとに気づまりなものになってきた。そこで彼は、この偏狭な世界から逃れるために、多くのつてを求めていたが、その一つとして1769年の春に哲学の教授としてエルフルト大学へ招かれた。ここでヴィーラントは、人類史や哲学や国家論(特にモンテスキュー流の)やギリシャ・ローマ文学について講義をして大成功をおさめた。ヴィーラントは、自分が得意の境地にあるかのような感じをもった。自分の教育的な素質を十分に開き、人間を啓蒙主義の意味において教育するという自分の関心事を今や直接に実践の場へ移しかえることができたからである。詩作、韻文物語、論文、批評等作家としても実り多き時期であったが、特に二つのロマン『シノペのディオゲネスの対話』(Die Dialoge des Diogenes von Sinope (1770年))と『黄金の鏡、あるいはシェスヒアンの王たち』(Der goldene Spiegel oder Die Könige von Scheschian) (1772年) が生れた。この二つのロマンのうち、後者はとりわけ一種の政治小説としてヴィーラントの啓蒙君主政治に対する考えが示されているので、ここに取り上げてみたい。作者がシェスヒアン語から翻訳したと主張しているこのロマンの内容は、次の通りである。

インドのゲバル王は、その前任者たちの浪費癖によって国家滅亡の危機にさらされていたが、お気に入りの臣下アルマハルと哲学者のダニシュメンドによって、楽しみと教訓のために、シェスヒアンの歴史についての講義をうける。アジアの地域のどこかに存在すると考えられるシェスヒアン国は、300もの小さい細かな区域に分裂していて、絶えずお互い同志争い合い、その臣下たちを貧困の不幸の中に突き落とす自分勝手な領主たちにより支配されている。共同の首長として王様を選挙しても、不十分な権力しか与えられないので、少しも改善が見られない。混乱はなおも続いたが、ついにタタル人の領主オグルが国を征服して、絶対主義政権を樹立するに至る。オグルは、国民のために最善なものを求めたので、彼の政治はよい方向に傾く。オグルの後継者たちの政治のもとでも、その後さらにシェスヒアンの生活はますますであった。

しかしリリーという美人が現われて宮廷で放縦とぜいたくと生の享楽の限りを尽くしたので、道徳的墮落が始まる。リリーの息子のアツオールのもとで、乱脈はその頂点に達する。彼のお気に入りの臣下たちは、自分の利益のために国を支配し、彼の寵愛を受けた女アラバンダは、けたはずれの浪費癖によって一層シェスヒアンの滅亡を招くことになる。その上国土は二つの派に分れた烈しい宗教戦争によって分裂し、一方は青い猿を最高の神として崇拜し、他方は火のように真っ赤な猿を崇拜する。アツォールのあとつぎのインファンディアルのもとで、宗教的争いは革命にまで進み、特に王は、そのお気に入りのエブリスの影響を受けて国民をはげしくしいたげる。インファンディアルは、ついに殺害されてしまう。

この時インファンディアルの跡継ぎのティファンが、国民の幸福だけを心にかける領主として出現する。賢明の施策により、まもなくティファンは国を再び豊かに繁栄させ、模範的国家の創立者になる。ティファンに続くシェスヒアンの支配者たちが、ティファンの指示を守っている間は、引きつづき万事好調であった。しかし賢明なティファンのことを忘れて、また昔の誤りを犯し貴族

と聖職者達が争ったり、宮廷が新しい侵略戦争を引き起したり、新税を国民の
上へ押しつけると、シェスヒャンの人たちはまたしても革命へと蜂起するの
である。しかしながら今度の場合は、混乱をおさめることのできる新しいティ
ファンのような人が存在しない。絶えまない争いや陰謀や扇動政治家たちの容
赦ない権力斗争は、ついにシェスヒャン国を滅亡させ、シェスヒャンは簡単に
隣国諸国のえじきになってしまい、国は分裂して隣国諸国に合併されてしま
うのである。

すでに述べた『ドン・スィルビオ』や『アーガトン』やあとで触れること
になる『アブデラの人々』など同じように、ヴィーラントはその題材をドイツ以
外の国に求めている。このことはよくいわれるように、「ロンドンもパリもな
かった」ドイツの社会的現実が彼にこのような態度を取らしめたといえよう。
しかしながら筋書を一見して、国民が抑圧され、領主の浪費癖や戦争好きに悩
まされ、寵臣支配や側室政治におかされ、馬鹿げた宗教戦争にさいなかれてい
るシェスヒャンという国は、神聖ローマ帝国 (Das Heilige Römische Reich
Deutscher Nation) の詳細に渡る引き写しであることは、すぐ看取される。こ
の点では、当時のドイツの現代的問題をイタリアの宮廷に移さざるをえなかつ
たLESSINGの『エミーリア・ガロッティ』(Emilia Galotti) (1772年) が
思い出される。LESSINGの場合と同じく、ヴィーラントがアジアの専制政
治の姿を借りてドイツの不都合な状況を描かざるをえなかつたのは、当時のド
イツの専制政治によって引き起された精神的な隷属状態であった。従ってこの
ロマンの実践目的が祖国における不都合な状況を弾劾することによって克服し、
領主たちを理性へと導くことによって乗り越えることであったことは、明らか
であろう。ヴィーラントのような徹底した啓蒙主義者でも、何もかも根底から
覆す革命による克服を望まず、革命は成功を約束する手段ではないと考えてい
た。彼の希望は、当時の多くのドイツの啓蒙主義者と同じように、支配領主た
ちをよい方向へ教育し、感化することであった。ヴィーラントは、フランス革

命（1789年に起っているから、『黄金の鏡』より十数年後である）の時代に「シェスヒェンの王様はフランスの専制君主（作者注：ルイ16世を指す）に対してどんな影響を与えることができただろうか、何の影響を与えようもなかったであろう」と述べ、またゾフィー・ラロシュにあてた手紙の一部で『黄金の鏡』は、文明国のお歴々や貴人たちが人類の歴史から学ばなければならないもっとも有益なことを簡潔にダイジェストしたものです」と書いている⁴⁴ことは、このことを証明している。そのような意味では、『黄金の鏡』はドイツにおける啓蒙主義時代の貴重な文学的記録ということができよう。

さてエルフルトでは、ヴィーラントは数々の成功をおさめたにもかかわらず、絶えず増大する多くの困難と戦わなければならなかった。人口わずか1万6千人のエルフルトでは、正統信仰と異端審問の名残りが支配的であったからである。大学の評議会は、自由思想家であるヴィーラントに対して抵抗を示した。もっとも陰險な黒幕の2人の人物は解任されたが、陰謀はどんどん進んだ。1770年の1月には、シュヴァルツという名前の学生が逮捕され、「ヴィーラントの講義だけしか聴講していない」という明白な説明をつけて、神を冒瀆した罪で告訴された。この事件が解決し、シュヴァルツが再び自由の身になるまでには、高度のとりなしが必要であった。このようなエルフルトの市当局の態度は、ヴィーラントにとっては、先住地ビーベラハの評議会を思い出させた。彼は1679年の10月18日にゲスナーにあてて「何という人々、何という頭脳の持主なのだろう！ 何という風習、何という野蛮さ、何という知性のなさ、冷酷、悪趣味だろう！ こういう人達は、教育して人間に仕上げなければならない」と書いている。

このようなエルフルトの不愉快な状況は、どこか別の活動の場を求める決心をさせることになった。

ビーベラハ時代より自由な時間に恵まれたヴィーラントは、この頃何回かの旅行を試みている。まずライプツィヒへ出かけ、出版者のライヒと個人的に知

り合い、またゲーテの絵の先生であったライプツィヒの美術学校長エーザーと親交を結んだ。1771年には、ラロシュ家の招待を受け、コーブレンツに滞在し、ここで批評家のメルク、後にヘルダーの妻になったカロリーネ・フラクスラント、詩人のヤコービー兄や理想主義の哲学者ヤコービー弟などと知り合いになった。これらの人たちは、後にワイマールで交友の輪を広げることになるのである。ヴィーラントは、『黄金の鏡』をもってヴィーンへの招待を手に入れたいと希望したが、自由思想家に対して抵抗するカトリック信者の支配する宮廷のために失敗した。ヴィーンの皇帝ヨーゼフ二世は、プロイセンのフリードリヒ二世と並んで当時の多くのドイツの啓蒙主義者達にとっては、社会生活と精神生活の改善をはかってくれる希望を託することのできる君主であった。

しかしながらヴィーラントを招聘したのは、人口わずか10万の小国ザクセン・ワイマール・アイゼナハ公国であった。この国は、1758年以来アンナ・アマリア公爵夫人の摂政政治のもとにあり、夫人は貧しい国の経済を改善し、支出と収入の関係を好都合な状態に買こうと努力していた。精神的にも大変広い心の持主で、子供達の教育に特に心をくばっていた。そしてこの課題にとって『黄金の鏡』の著者、すなわち賢明で巧みな君主によって指導される君主国を描いた人が、とりわけ適切であるように思われたのである。1771年の11月には、公爵夫人みずから初めてヴィーラントに会い、72年の9月には、ヴィーラントはワイマールに移住することになった。公爵夫人は、彼に1,000ターラーの年収と生涯の年金と宮廷顧問官の称号を提供させた。公子のカール・アウグストは、才能も人より優れ、理解力も早く、啓蒙主義の理念に好意を抱いていたので、ヴィーラントの努力は、実り豊かな土壌を見出したのであった。そしてそれはアウグスト公が統治の間、「祖国の父」であろうと努め、才能ある市民階級の人たちを宮廷へ引っぱり、啓蒙主義の思想を実践に移すことに役立ったのである。1775年カール・アウグストが成年に達すると同時に、ヴィーラントの公職は消えたが、年金によってその時から、自由な作家として生活す

ることができ、ワイマールを出て行くことは、ごくまれであった。

こうしてヴィーラントは、長い間心に抱いていた計画、つまり雑誌の発行を実現することができた。この雑誌すなわち『デア・トイチェ・メルクーア』(Der Teutsche Merkur)によって、彼は啓蒙主義の意味において国民全体に感化を及ぼすことができた。ヴィーラントには優れたジャーナリズムに向いた天賦の才があり、これによって約30年の間、『メルクーア』はドイツにおけるもっとも影響がありまたもっとも人気の高い雑誌の一つとして君臨しえたのである。この雑誌の予定計画については、「編集者の前書き」の中でくわしく述べられているが、それによればこの雑誌を文学、芸術および政治を含めてあらゆる学問分野からの興味深いニュースや報告や論評のための機関誌たらしめたいとある。時にはゲーテ、ヘルダー、メルク、シラーなどのような一流の作家や批評家を協力者として仰ぐこともあり、ヴィーラント自身は、その晩年の作品をほとんどすべて『メルクーア』誌に発表し、多数の水準の高い論文や雑録や書評などを書いた。それらの論文などのあつまっているものは、ギリシャ・ラテンの文学、イタリア、フランス、イギリス、ドイツの文学から、ドイツ語、美学、哲学、科学と政治の当時の話題の問題にまで及んでいる。『メルクーア』誌の発行部数は、最初は約2,500であったが、その後ずっと1,500部を維持した。当時のドイツでは、純文学の雑誌の発行部数は平均して1,000部ぐらいであったから、この数値はかなりの数といってよいであろう。この雑誌が廃刊になったのは、1810年のことである。

ヴィーラントのワイマール滞在は、1772年から死去する1813年まで約40年に及ぶが、その最初の10年には多くの詩的作品、とりわけしゃれた韻文物語を発表した。読者から大いに迎えられたこれらの韻文叙事詩の中では『冬物語』(Das Wintermärchen) (1776年)、『ペルヴォンテ』(Pervonte) (1778-96)、『オーベロン』(Oberon) (1780年)の三つが傑出している。『冬物語』は「千一夜物語の第一部の物語による」(nach einer Erzählung im ersten Teile von

„Tausendundeiner Nacht“)と副題にあるように、『千一夜物語』の語り手とされる王妃シェヘラザードが物語った話という形式になっていて「漁師と精霊」「不運な島々の王様」の2部からなり、ある王様が魔法使いの女に魔法をかけられたが、偶然その王様の支配する島の城に入ったサルタンによってその魔法から解放される話で、当時存在したひとりよがりなめめめめした感傷主義に対する愉快的な風刺文学になっている。『ペルヴォンテ』もイタリアの童話作家ジョヴァンニ・パティスタ・バズィーレ (G. B. Basile) (1575-1632) の『五日物語』(Pentamerone) にその題材を負っているが、完全に自由に創作したものである。第3部はずっと後年になって作られ、1796年に全集の中で初めて発表された。

舞台は南イタリアの都市サレルノで、ここにヴァストーラという美しい王女がいて、たくさんの求婚者たちに取り囲まれていた。一方森には小農の息子であるペルヴォンテがいて、ある時母親にいつけられて、たき木を集めるために森の中へ入って行くが、3人の若い美女が日なたぼっこをして眠っているのを発見して、木を切って彼女たちの周りに囲いを作ってやる。3人の娘は、目を覚ましたときに、ペルヴォンテの好意に感謝して、「私たちは妖精で、この恩を忘れるようなことはありません。何でも望むものを要求して下さい。たちどころにそれを実現してあげましょう」という。そこでために「私を家へ運んでくれるといいのだが」というと、馬が現われて、ペルヴォンテとたき木の束を町の中や城のそばを通してペルヴォンテの家へ運んでくれた。窓から新しい騎士がそばを通して行くのを見て、ヴァストーラ王女は「みにくい化け物だ」と悪口をいう。この悪口を耳にしたペルヴォンテは、思わず「王女なんて、すぐにおれの双子を生めばいい」と口に出す。すると4ヶ月が経過するかしないうちに、双子が王女に生れる。双子の娘は愛らしく育ったが、6歳になったときに、侍従長のすすめで舞踏会を開き、子供の本能で親が誰であるかを知ろうとする。ペルヴォンテも、きたならしい格好をして髪の毛をぼうぼうにして、

靴もはかずに現われる。2人の娘はペルヴォンテを見つけるやいなや、彼のもとへ走りよりその場にいた人達みんなを驚かせる。王様は「こんなならずものの子供が私の孫なのか」とばかり怒り狂って、ヴァストーラと2人の娘とペルヴォンテをワインだるの中へ投げ込み、そのたるを海の中へ投げ入れ、風と波のままにまかせる(第1部)。たるの中で妖精の魔法のことを聞いたヴァストーラ王女は、ペルヴォンテに「たるを船にかえて、ナポリ湾のバイヤ港に連れて行く」ように妖精に頼めという。岸に着くと、今度は「船を美しい城に代える」ように頼めという。美しい城が出来上って、ペルヴォンテも今やペルヴォンテ王子と呼ばれるようになると、ヴァストーラは「あなたに欠けている知力を、もう少し頭脳を欲しい」と妖精に頼めという。妖精にそのことを頼むと、皮肉なことに分別が備わって「たえず新しい贈り物をおねだりするのは貪欲で厚かましいというものである。今やわれわれに必要なのは、足ることを知ることである」とペルヴォンテはいうのである(第2部)。第3部は前述のようにずっと後年になって加えられたものであるが、ヴァストーラとペルヴォンテは、新しい城で夢のように幸福な生活を送っていたけれども、やがてヴァストーラは退屈し始め、生れ故郷のサレルノへちょうど王様の祝祭があるので、連れて行ってくれるように妖精に頼んでくれという。このようにしてヴァストーラは、サレルノからナポリへ、さらにヴェニスへ行くようにと次々と要求するが、ペルヴォンテはついに、「大都会の喧騒は、私の好みではない」という。それに対してヴァストーラは、最後のもう一つのお願いとしてソレントへぶどう狩りに招待されているので、お金の一杯入った財布をもって行かしてくれるように頼む。ペルヴォンテが妖精にそのことを頼むと、たちまちその願いはかなえられる。「さよなら、道中ご無事で」とペルヴォンテはヴァストーラを見送ってから、部屋へこもり、かんぬきを差して、ひざまづいて声をはり上げて「親切な妖精さんたちよ、わたしの最後の願いを聞いておくれ、わたしがあなたがたのおなさけによって手に入れたものを全部もう一度持って行って、わたしがお

願いをはじめた時の元の状態にもどして下さい」と叫ぶと、突然ペルヴォンテは、年老いた母のあばらのまん中に立ち、この喜劇は大団円となるのである。

ヴィーラントは、この韻文物語の中で教養もなく卑しい小農の息子であるペルヴォンテの運命によって、人類の発展の特徴を明らかにしている。すなわちもともとは無意識的で本能的で鈍い行動が、比較的高度な段階に達すると、自由と必然性の関係を洞察することによって意識的な行動に変化するのである。しかしながらこのような内容になったのは、1794年から95年にかけて成立した第3部の完成によってであった。このような内容になるに至ったのは、ヘルダーの提案によるところが多い。というのももともとは、妖精たちは願いがとによって与えられたものを全部返してもらうことになっていたからである。

ヘルダーは、ヴィーラントがフランス革命におけるいろいろな事件についての悲観的な気分ひきずられていたこのような結論に対して、1795年1月の手紙の中で、「思慮分別、それもその最良のものは、極めて気高い天からの心からの贈り物でありますから、しっかりした人間、しかも苦しみ抜いたしっかりした人間からは、魔法の杖などでは奪い取ることはできないでしょう」と異議を申し立てている。⁴⁴ この物語の中でも宮殿とあばらやの対立が摩擦を生み、むなしい宮廷の歓楽に熱中する虚栄心の強いヴェストーラ王女は、最後にはペルヴォンテが母親のあばら屋で見出す幸福に満ちたつつまじやかな生活へのはげしい憧憬の念によって、然るべき報いをうけるのである。

ヴィーラントが書いた韻文物語の中でもっとも重要で規模の大きいものは『オーベロン』(Oberon) (1780年)であるが、この物語の大筋は13世紀のフランスの武勲詩(chanson de geste)の一つである『ユオン・ドゥ・ボルドー』(Huon de Bordeaux)から取られている。この韻文物語にヴィーラントが着手したのは、1778年の11月のことで、1779年はずっと仕事にかかり、1780年の2月23日に完成し、3月10日に印刷が完了した。そして80年の『デア・トイチェ・メルクア』に『オーベロン、14章からなる詩文』(Oberon, ein Gedicht

in vierzehn Gesängen) として発表された。その後何回か改作され、1785 年には、12 章に分けられ、『読者へ』(An den Leser) という序文が添えられた。最終的な形になったのは、1796 年のことで、全集の 22 巻と 23 巻の形で発表された。

以下手短かにその梗概を追ってみよう。

若い血氣さかんな騎士であるヒューオン（フランス語ではユオン）はカール大帝（シャルルマーニュ）の怒りを招く。その怒りを鎮めるためには、バグダッドのイスラム教国の君主から、4 本の臼歯と 1 束のひげの毛を奪い、その高官の一人を打ち殺し、君主の娘のレーツィアを妻として獲得しなければならない。

妖精の王であるオーベロン（フランス語では Auberon）（その妻であるティターニアと共に、シェイクスピアの『真夏の夜の夢』にも登場する）は、過大な任務を負わされたけなげなこの騎士を援助しようとする。オーベロンは、妻のティターニアが不倫をした女をかばったために、妻と仲たがいがいし、一組の男女が清純で変ることのない愛の理念を実現したときに、はじめてもう一度仲直りができる。

ヒューオンとレーツィアはこの試練に耐えなければならない。ヒューオンは、それを吹いて呼べばいつでもオーベロンが助けに駆けつけてくれる笛をもらう。かくして彼はバグダッドへ向う途中、数々の危険を克服し、イスラム教国の宮殿で自分の価値を認められる。ヒューオンとレーツィアは、バグダッドでひと目見て愛し合うようになり、結婚するためにローマへ逃げる。オーベロンは、ふたりが早まって夫妻生活を行わない限りは、かれらを保護することを約束する。しかしながらふたりは——あまりにも人間的なことではあるが——瞬間の誘惑に負けてしまう。そして罰としてかれらは、さびしい島へ漂着させられる。しかしながら、ここでは隠者のアルフォンソが力をかしてくれ、ふたりは倫理的に清められる。ふたりは一緒に困難と辛苦に堪えたのちに、アマンダ

(レーツィアは、洗礼をうけてこのように呼ばれるようになった)は海賊に襲われ、チュニスへ連れて行かれる。しかしながらオーベロンがまたしても援助の手を差し伸べてくれる。オーベロンは、ヒューオンにチュニスで、旧友のシェーラスミンとアマンダの乳母であるファトメに会わせる。シェーラスミンとファトメは、ヒューオンをアマンダの滞在している所へ連れて行く。しかしながら愛し合うふたりの貞節を証明する最大の試練が前途に待ち受けていたのである。すなわちそのイスラム教国の君主であるアルマンゾルがアマンダに、女王のアルマンザリスがヒューオンに、ぞっこん惚れ込んでしまったのである。しかしながらヒューオンとアマンダのふたりは、愛を裏切るよりはむしろ焼け死ぬことを選ぶ。このことによって、ふたりはオーベロンのおきてを満たして救われ、その小さな息子と無事に一緒にになれる。とどのつまりヒューオンは、パリにおける馬上試合で勝利をおさめ、自分自身世襲封土を取り戻し、カール大帝は、ひげの毛と白歯によってその怒りをやわらげるのである。

ヴィーラントは、前述した『読者へ』という序文の中で「実際のところ、オーベロンは二つ、正確に言えば三つの主要なストーリーから構成されている。すなわちヒューオンが皇帝の命令で乗り切ることを引き受けた冒険の旅、レーツィアとヒューオンの恋愛関係の物語、ティターニアがオーベロンと再び和解する話の三つである。しかしながらこれらの三つのストーリーあるいは主題は、どの一つを取っても他の二つがなければ、存在しえないか、あるいは幸せな結果が得られないように、中心をなす結び目でからみ合わされているのである」と述べているが、彼は中世の騎士物語を題材にして、三つのストーリーを芸術的に巧みに組み合わせて、人間の心の純化と成熟のテーマを描いている。妖精の王夫婦のオーベロンとティターニアの不和は、真に愛し合う人間的なカップルによってのみ克服される。ヒューオンとレーツィアの愛は、数々のかれらに課せられた試練の中で、真実であることが実証される。真の愛は人間を浄化し、その最良の能力を発揮させる。気高いもの、人間的なものは、すべての悪と非

人間的なものに打ち勝つ。これがこの叙事詩の根本思想である。

『オーベロン』が完成したのち、ゲーテはヴィーラントに月桂冠を贈り、感激のあまりラファーターにあてて「オーベロンは、詩が詩、金が金、水晶が水晶としてなくなる限り、詩的芸術の傑作として愛され、賞讃されるであろう」(Oberon wird, solange Poesie Poesie, Gold Gold, Kristall Kristall bleiben wird, als ein Meisterstück poetischer Kunst geliebt und bewundert werden.) と書いている。『オーベロン』を傑作たらしめている要素には、三つの点が考えられる。一つは中世の芸術的パロディー化である。例えばのちに浪漫派によって本気で憧憬の念によって迎えられた騎士階級の光栄は、啓蒙主義の息子であるヴィーラントにとっては、次のように読者を楽しませるのに役立つだけである。

騎士の大きな務めは、乙女たちを守ることです。たとえ呼び声に応じてすぐにどんな乙女のためにでも、自分の血を散らす気にならないときでもです。

(Des Ritters große Pflicht war, Jungfrau zu beschützen

Und, wenn sein Herz sich gleich unangemutet fühlt,

Auf jeden Ruf sein Blut für jede zu verspritzen.)

(第 3 章 39 節)

第二点は、ヒューオンのレーツィアに対する感動的な愛の物語である。第 7 章の 46 節から 47 節にかけての次の詩句は、全叙事詩の中でもっとも心を打つものの一つである。ヴィーラントは、ヒューオンが恋人が餓死の恐怖にさらされたと思った時の岩石の島での彼の苦しみを次のように描いている。

わたしは、君が私の目の前でやつれ果てて行くのを見なければならぬのか？

あんなになさけの深い美しい自然の作り出した奇蹟ともいふべき君が。

やつれ果てるなんて！ ただわたしのためにみじめな思いをし、わたしのためにたくさんのものを捨ててしまった君が。

天の怒りが君をわたしの腕の中へ突き刺ささないうちに
 君の星がもっとも美しい運命を約束してくれた君には
 君には（ここでかれは、怒りと不安のあまり大声でわめき始めた）
 餓えを満たすだけでも、大したことは残されていないのだ！

かれは言語に絶する苦悩の中で大きな叫び声を上げた。
 それからがっくり倒れて、ぞっとするような静寂の中にとどまっていた。
 だがついに一条の信頼の輝きが彼の心の中へさしこんだ。
 かれは意気消沈した不幸な状態におおわれた状態の中から、すっと立ち上
 り
 みずからを励まし、熱意を新たにして探究を始めるが、長い無駄な努力だっ
 た。
 もはや大洋の中では、太陽の名残りは金色に変わろうとしている。と突然、何
 たる狂喜か！
 むさばるように跳めるかれの視線に、世にもすばらしい果物が姿を現わして
 いるのだ。

(Verschmachten soll ich dich vor meinen Augen sehn,
 Du Wunder der Natur, so liebevoll, so schön!
 „Verschmachten dich, die bloß um meinetwillen
 So elend ist, für mich so viel verließ!
 Dir, der dein Stern das schönste Los verhieß!
 Eh' dich des Himmels Zorn in meine Arme stieß
 Dir bleibt“ (hier fing er an vor Wut und Angst zu brüllen),
 „Bleibt nicht so viel, den Hunger nur zu stillen!“

Laut schrie er auf in unnennbarem Schmerz;
 Dann sank er hin und lag in fürchterlicher Stille.
 Doch endlich fällt ein Strahl von Glauben in sein Herz:

Er rafft sich aus des Trübsinns schwarzer Hülle,
Spricht Mut sich ein und fängt mit neuem Eifer an
Zu suchen. Lang umsonst! Schon schmilzt im Ozean
Der Sonnenrand zu Gold — auf einmal, O Entzücken!
Entdeckt die schönste Frucht sich seinen gier'gen Blicken.)

このような詩句に触れるとき、『オーベロン』は、愛の讃歌と呼んでも不当ではないであろう。

第三点は、『オーベロン』のもつ魅力たっぷりに描かれたおとぎの世界で、次のような描写では、ヴィーラントは完全に並はずれた状況を色とりどりの色彩で描くのを楽しむ童話作家になっている。すなわちヒューオンがバビロンの宮廷で、自分に立ち向ってくる回教国君主の怒りに燃えた従者たちから身を守るために、魔法の笛を吹き鳴らしたときに、次のような光景が描かれているのである。

突然大上段に抜いた剣がどのこぶしからも抜け落ち、高官たちの手は、すぐに棒となって踊りの輪へと結ぶ。

騒々しいそれ行けの声が広間に狂ったように響く、老いも若きも、足のあるものはとびはねずにはいられない。

笛の魔力には、だれかれの差別はない。ただレーツィアだけが、この摩可不思議を見て肝をつぶす。

しかし喜んでもいてヒューオンのわきに立ったままである。

宮廷の廷臣全部が輪を作って、ふらふらしながらぐりと回る。年配の役人たちは、それに合わせて拍子を鳴らす。そしてすべすべした氷の上でのように、回教の導師自身も宦臣たちと踊るのが見える。

地位も年齢も、何の惜しいことがあろうか。ついには君主までが、欲望をおさえ切れず、宰相のひげをつかまえて、この老人に馬とびを教えようとする

る。

前代未聞のどんちゃん騒ぎが、やがてどの控えの間からも、近従たちの群をおびき出し、それから婦人たちや、さらには番兵までもおびき出す。

かれらはみんなこの陽気な気違い騒ぎのとりこになる。

魔法の陶醉は、ハーレム全部を解放し、庭師までがカラフルな前垂れをつけて、若い妖精たちとの行列に飛び込んで行くのが見うけられる。

(第5章46節から48節まで)

(Auf einmal fällt der hochgezückte Stahl
Aus jeder Faust; in raschem Taumel schlingen
Der Emirn Hände sich zu tänzerischen Ringen;
Ein lautes Hussa schallt durch den Saal,
Und jung und alt, was Füße hat, muß springen;
Des Hornes Kraft läßt ihnen keine Wahl;
Nur Rezia, bestürzt, dieß Wunderwerk zu sehen,
Bestürzt und froh zugleich, bleibt neben Hüon stehen.

Der ganze Diwan dreht im Kris
Sich schwindelnd um; die alten Bassen schnalzen
Den Takt dazu; und, wie auf glattem Eis,
Sieht man den Iman selbst mit einem Hämmling walzen.
Noch Stand, noch Alter wird gespart;
Sogar der Sultan kann der Lust sich nicht erwehren,
Faßt seinen Großwesir beim Bart
Und will den alten Mann noch einen Bockssprung lehren.

Die nie erhörte Schwärmerei
Lockt bald aus jedem Vorgemache
Der Kämmerlinge Schar herbei,
Sodann das Frauenvolk und endlich gar die Wache.

Sie all ergreift die lust'ge Raserei :
 Der Zaubertaumel setzt den ganzen Harem frei ;
 Die Gärtner selbst in ihren bunten Schürzen
 Sieht man sich in den Reihn mit jungen Nymphen stürzen.)

『オーベロン』は、当時のほとんどすべての文化国の言語に翻訳され、また 1826 年のカルル・マリーア・フォン・ヴェーバー (Carl Maria von Weber) (1786-1826) の場合のように、オペラ化されてもおり、モーツアルトの『魔笛』(Zauberflöte) (1791 年) にも明らかに『オーベロン』の影響が見られる。

以上述べた韻文物語と並んで、1773年から81年にかけて成立したのが(他の仕事のためにしばしば中断した)諷刺小説の傑作で、ドイツにおけるユーモア小説の数少ない名作の一つである『アブデラの人びと』(Geschichte der Abderiten)である。この本が完全な形で出版されたのは、1781年の秋であるが、その後もヴィーラントによって手を加えられ、今日見られる最終的な形になったのは、1796年の5月に出版された全集の19巻と20巻においてである。『アブデラの人びと』の舞台は『アーガトン物語』と同じく古代ギリシャで、アブデラというのはエーゲ海沿岸のトラキア地方の都市で、古代ギリシャではその住民が偏屈なひねくれ者として悪評が高く、そのために Abderit という、民衆本に出てくるシルダの市民 (Schildbürger) が「あほう、ばか者」の意味で使われるように、「小市民、愚か者」の意味でも使用される。

また哲学者のデモクリトスやプロタゴラスの故郷でもある。その構成は「序言」(Vorbericht)、第1部「アブデラの人びとの中のデモクリトス」(Demokritus unter den Abderiten)、第2部「アブデラにおけるヒポクラテス」(Hippokrates in Abdera)、第3部「アブデラの人びとの中のエウリピデス」(Euripides unter den Abderiten)、第4部「ロバの影をめぐる訴訟」(Der Prozeß um des Esels Schatten)、第5部「ラトーナ (アブデラの守護女神) の蛙」(Die Frösche der Latona)、「アブデラ物語への手引き」(Der Schlüssel

zur Abderitengeschichte) からなっている。

ストーリーを追うこと自体は、この場合大して意味のあることのように思われぬが、一応荒筋を記してみよう。ヴィーラントはまずアブデラの町の起源と住民の性格についての報告をし、アブデラがドイツにおけるシルダ、スイスにおけるラーレンブルクのような都市に当ることを明らかにしている。そしてアブデラの人びとの中でもっとも有名で、ただひとり本当に賢明な市民であるデモクリトス（哲学者でも自然研究者でもあった実際のデモクリトスとは、関係がない）を多年に渡る研究旅行から故郷のアブデラへ帰国させるところから、物語が始まる。第1部では、デモクリトスの物語や意見についてのアブデラの人びとの判断や見解の中で、かれらの偏狭さが明らかにされる。とどのつまり、アブデラの人びとは、ただひとりちゃんとした人間であるデモクリトスを精神病者とみなし、デモクリトスの精神病を確証させるために、有名な医師のヒポクラテスを自分たちの町へ連れてくる。

しかしながらヒポクラテスは、すぐれたデモクリトスと心から理解し合い、デモクリトスではなく、アブデラの人たちのほうが病気であると宣言し、その治療のために、馬鹿につける薬として、クリスマスローズの根を処方すると、ヒポクラテスはいんちき医者にされてしまう。第3部は悲劇作家のエウリピデスが偶然アブデラの町に滞在することになって、アブデラの人たちの芸術に対する全く浅薄で困襲的な見解を明らかにするきっかけを与える。もっともサスペンスに満ちているのは、次の第4部でこのロマンの頂点をなしている。あるロバを借りたときに、ロバの影も一緒に借りたかどうかの問題をめぐる、アブデラの住民は二つの党派に分裂し、おたがいに陰謀と扇動でもって争い合うのである。そしてこの対決が頂点に達したとき、アブデラの町全部ががたがたになる。なぜなら群衆が市の立つ広場で花を飾ったロバを襲って殺してしまったからである。第5部は宗教問題を取扱っている。アブデラでは町の守護女神であるラトーナに敬意を表してカエルが飼われていた。首席司祭は、世論を味

方につけようとして、公共の施設に公けのカエルの堀を作らせる。このことが例になってまともな市民はみんな自分自身のカエルの池を作ってしまう。とどのつまりは、カエルはとめどもなく増えて、たえがたい重荷となり、アブデラの人たちは町を放棄して、マケドニアの国境のどこかに移住するのである。

ゲーテは 1813 年 18 日に行った「ヴィーラントの友愛の思い出のために」と題する追悼の辞の中で「彼は、われわれが俗物根性といいならわしているすべてのものに対して反抗している。かびのはえたようなこせこせしさ、小市民的の性格、みすばらしいわべだけのしきたり、偏狭なあげあしとり、あやまった気どり、浅薄な安易さ、思いあがった尊大な体面、無数にあるこのような化物がどのように呼ばれようと」(Er lehnt sich auf gegen alles, was wir unter dem Wort Philisterei zu begreifen gewohnt sind, gegen stockende Pedanterei, kleinstädtisches Wesen, kümmerliche äußere Sitte, beschränkte Kritik, falsche Sprödigkeit, platte Behaglichkeit, anmaßliche Würde, und wie diese Ungeister, deren Name Legion ist, nur alle zu bezeichnen sein mögen.) と述べているが、このゲーテの言葉がもっともあてはまるのが『アブデラの人びと』であることはいうまでもない。この作品の中で、ヴィーラントはギリシャという古代の仮装のもとで、ドイツの平均的な市民の俗物性を嘲笑し、あざけるのである。当時のばらばらに分裂したドイツにおいて、想像を絶する程の広がりを見せていた俗物根性は、すでにそれ以前からしばしばヴィーラントのあざけりの標的になっていたが、ここではそれが主要なテーマになっている。

というのもヴィーラントがビーベラハやエルフルトやワイマールで経験した俗物根性に対する戦いなしには、個人を高貴な人間性へ高めることも、社会的現実の変革も不可能であったからである。封建的な絶対主義 (Feudalabsolutismus) と教条主義 (Orthodoxie) と俗物根性 (Spießbürgertum)——この 3 つが 18 世紀のドイツの市民階級が解放のために克服しなければならなかった主

要な障害物であった。ヴィーラントが『アブデラ物語への手引き』の中で述べているように、「かつては人口が多く大きな繁栄した商業都市であり、トラキア地方のアテネと呼ばれ、プロタゴラスやデモクリトスを生んだ都市」であるアブデラはもはや存在しない。しかしながらアブデラの人びとはそうではないのである。「これらの人びとは、その本来の住所は地上から消えてしまったけれども、今でもなお常に生き活動している。かれらは不滅で死に絶えることのない連中であって」「フランクフルトやライプツィヒやコンスタンチノーブルやアレppoで、ユダヤ人がすぐ判るように、アブデラの人に出会えば、アブデラ人であることは一瞬間見たり聞いたりするだけで十分なのである。」ヴィーラントは、『アーガトン物語』やその他のロマンでは、物語の途中で大いに反省してみたり、教訓的な調子を響かせたり、時には脱線したりしているが、この『アブデラの人びと』の中ではリアリズムの本質的な要素をもった直接的な感銘を与えるロマンを作り出しており、ドイツにおける市民的ロマンの最初の傑作といえることができる。

1880年代から90年代にかけては、ヴィーラントは、主としてローマやギリシャ文学の翻訳に従事し、また評論家として活躍した。その論文の中には、ヴィーラントの豊富な知識や興味や啓蒙主義的な関心事のスケールの大きさが映し出されているが、その中でも1782年から84年にかけて『デア・トイチェ・メルクーア』誌上に発表された『若き詩人への手紙』(Briefe an einen jungen Dichter)は、ヴィーラントの美学を総括したもので、芸術形式の問題に対する見解で、ゲーテやシラーにも影響を与えている。

このようにしてヴィーラントがその作家としての峠を越えたかに見えたとき、1789年にフランス革命が勃発した。この革命はヴィーラントを精神的に若返らせ、その創造力に新たな刺激を与えたのである。ヴィーラントは、その論説の中で1774年までフランスにおけるもろもろの事件について報告したり、註釈を加えているが、現実の政治的な事件に対する彼の関心と理解は、当時の他の

ドイツの作家たちよりもきわだっており、『デア・トイチェ・メルクーア』誌は、ドイツにおけるフランス革命についてのもっとも重要な情報源であり、また世論形成の刊行物の一つになったのである。

ヴィーラントがフランス革命に対してどのような態度をとり、どのような見解をもったかについて、ここで詳しく述べる余裕はないが、それは首尾一貫していた。すなわちヴィーラントは、イギリスを模範にした立憲君主制の枠内における市民階級の解放を希望していたのである。1793年に始まったジャコバン党の政権を、彼は拒否したけれども、ドイツの当時の状況をふまえながら、フランス革命はドイツの領邦君主に対する警告ではあるが、社会情勢変革の模範ではないと、彼は考えていた。改革と平穏と節度、暴力的な革命に代る理性的な発展——それがフランス革命のドイツに対する影響に取り組んだヴィーラントのすべての考察の基調をなすものである。ヴィーラントのフランス革命の意味についての見解は、次のような 1793 年 4 月 12 日に書かれたアナクレオン派の詩人グライム (J. W. L. Gleim) (1719-1803) にあてた手紙の中に簡明的確に総括されている。「こうしたことがあっても、私を元気づけてくれる点は、貴族や民主派の狂信主義の恐るべき爆発や、あらゆる犯罪的な激情の発作のさなかに、フランス革命が動因になった多種多様なよい点が人類にとって失われることなく、次第々々にひそかに、強制的なゆさぶりの運動もなしに何千という果実を実らせるであろうということです。というのは、良いものは何ものも失われることはありませんからです。」

1794年には、ヴィーラントの全集がライプツィヒのゲオルク・ヨーアヒム・ゲッシェン (G. J. Göschen) のもとで成功裏に出版され、1802年には全42巻が完成した。生存中の詩人のこのような大規模で膨大な作品の全集が出版されたのは、ドイツでは初めてのことであって、ヴィーラントは正にその栄光の頂点にあった。しかも全集の印税によって、彼はワイマール近郊のオスマンシュテットに土地を取得し、長年の夢を実現することができた。つまり宮廷から独立

して、自分自身の考えに基づいて生活し、創作することが可能になったのである。息子のカルルが農業の仕事を引き受け、家の改築も行われ、大きな果樹園もととのえられ、詩人はもう一度元気を取り戻したようであった。しかしながらこの晩年の幸せにやがて暗いかげりがさすようになった。1800年にはクレメンス・ブレンターノおよびベッティナー・フォン・アルニム兄妹の姉であり、ゾフィー・フォン・ラロシュの孫であったゾフィー・ブレンターノが死に、一年後には妻のドロテアも永遠の眠りについた。このような個人的な悲しい体験に結びついていたり、農業についての知識が不足していたりして、1803年には買い手が見付かって、ヴィーラントは再びワイマールへ転居した。

オスマンシュテットでヴィーラントが完成した晩年の二つのロマンは『善魔』(Agathodämon) (1799年)と『アリスティップと同時代の人びと』(Aristipp und einige seiner Zeitgenossen) (1801年)である。前者はキリスト教がローマ帝国へ伝った頃を舞台にしたロマンで、スィドニアのヘゲシアスが友人のティマゲネスにあてた手紙の形式を取っており、7部からなっている。ヘゲシアスは、この書簡の報告の中で、新ピタゴラス派の哲学者としての長い活動ののちに、クレタ山脈の理想郷のような土地に引退したティアナのアポロニウスを訪問したときのことを物語っている。

アポロニウスは、ここで迷信深いクレタの人びとによって守り神として尊敬され、その晩年をすごしている。アポロニウスは、自分を訪問してくれたヘゲシアスに信頼を寄せ、自分の生涯を語り、長い会話の中でその哲学的な見解を説明するのである。小アジア地方の出身で、才能もあり裕福でもあったアポロニウスは、青年時代エーゲの哲学学校へ通い、切りつめた生活法と節制の修業を積み、ディオゲネスとピタゴラスをその模範と仰ぎ、ついには新ピタゴラス派の教団を設立する。

この教団は、次第々々にローマ帝国全土に広まっていったが、その目的とする所は、古き神々への信仰を再建し、そうすることによってローマ帝国の道徳

的退廃を阻止することであった。時がたつにつれて、この教団は政治的活動を志すようになり、この活動は暴君ドミタンの殺害とネルヴァとトラヤンの王位登用によって頂点に達する。これらの事件は、ローマ帝国のモラルと強化に好影響を与えた。王位交代ののち、アポロニウスは教団から退き、クレタ島でその身分をさとられずに生活しているのである。ここで5部までのアポロニウスの自叙伝が終る。

第6部と第7部では、アポロニウスは自分の生涯を批判的に回顧しながら、キリストが創始者となったキリスト教について報告し、キリスト教が支配的な宗教に発展することを予言するが、結局はその絶対要求からは距離を置いた。キリスト教の絶対要求を、彼は個人的な自由に対する攻撃と感ずるからである。

このロマンの結末では、恐らくヴィーラント自身のものである懐疑的な不決然な態度が表明される。キリストはアポロニウスにとっては、純粹で高貴な人間性の体现であった。しかしながらキリスト教の歴史は、純粹な理念から常に新しい迷信への道のりであるように思われた。特にヴィーラントは、このロマンによって当時の秘密につつまれた教団、例えば光明会^{III}やばら十字会^{IV}やカヨストロ^Vやメスマー^{VI}などの現象に対して立ち向っているのである。

『アリスティップと同時代の人びと』も同じく書簡体の形式をもった4巻からなるロマンである。その内容をなすものは、紀元前4世紀のソクラテス派の発展と生活環境で、キュレネ派の祖であるアリスティップ（アリスティッポス）の世界観は、かなりの程度までヴィーラント自身の考えを反映している。ロマン的な色彩をそえるのは、才気あふれる遊女であるライスの錯綜した運命である。

しかしながらすでに1774年にはゲーテの『若きウェルテルの悩み』が、95年には『ヴィルヘルム・マイスターの修業時代』が、99年にはフリードリヒ・シュレーゲルの『ルツィンデ』が、97年にはヘルダーリーンの『ヒュペーリオ

ン』が発表されており、ヴィーラントはこれらのゲーテ以後のロマンの発展に取り残されてしまっていた。そして彼の生涯の最後の10年も、個人的および社会的なさまざまな事件が暗い影をおとしている。まず1803年には、親しくつき合ったヘルダーが、2年後にはシラーが死んだ。ついで1807年には、ゾフィー・ラ・ロシュとアンナ・アマリア大公夫人が死去し、14人いた子供のたちの中にも、その死を見送るものもいたのである。社会的には、ナポレオン軍の攻撃のもとに、1806年には「神聖ローマ帝国」が最終的に崩壊し、ヴィーラントは、はっきりと時代の転換を感じていた。ワイマールがフランス軍によって占領されたとき、「ドイツのヴォルテール」(Voltaire allemand) とフランス人から名誉をこめて呼ばれていたヴィーラントは、ほとんどすべての住民を襲った略奪の害をまぬがれた。そして1808年の10月には、ワイマールの宮殿で二人の間で記念すべき会談が行われた。ナポレオンにとっては、ヴィーラントは彼の栄進を予言していたことで特に興味をもっていたドイツの有名な詩人であった。ヴィーラントの方もナポレオンが偉大な人物であることを賛美し、ナポレオンをゲーテと比較し、考古学者であり、あとで『デア・トイチュ・メルクーア』の編集を引き受けたカルル・アウグスト・ベッティガー (C. A. Böttiger) (1760-1835) との会話の中で「ゲーテは、文学の世界でちょうど政治の世界におけるナポレオンにあたるのではないだろうか。かれらは二人とも、自分の欲することは何でもできるのではないだろうか。そしてかれらは、もっとも信じられないことや比類のないことを必ずしも望んでいる訳ではないが、それがもっとも自然のこのように思われるように、取り扱ったり、処理することができるのである」と語っている。ヴィーラントは、この時代にはナポレオンこそヨーロッパの平和をもたらす人であり、フランス革命の数々の成果を実現する人であると考えていたのである。しかしながらまさにこの点においてその後、苦々しい失望を味わった。そしてまもなくヴィーラントは、ナポレオンが1799年ブリュメール18日のクーデターによって軍事独裁を確立し、ついで

1804年に皇帝に即位したとき、これを拒否し、ナポレオンに対する抵抗運動を支持したのである。1809年にはヴィーラントは、フリーメーソン支部の「アンナ・アマール」に入会したが、これもますます強圧的になったナポレオンという外国人による支配の優位に対する新しい精神的な対決の姿勢をえんがための一つの試みとして考えられたものであった。

このような社会的変動があったにもかかわらず、ヴィーラントの晩年の文筆活動は、疲れを知らない充実したものであった。この時代の作品や論文や古代文学の翻訳の中では、1805年に刊行された『ローゼンハインの六日物語』(Das Hexameron von Rosenhain)の中におさめられた『題名のないノヴェレ』(Die Novelle ohne Titel)への序言の中で、会合の席で談話の割り当てを受けたM氏の言葉を借りて、ロマンの次に来るべきノヴェレについて最初の定義を与えていることを指摘しておこう。

ヴィーラントは、その死の40日ほど前にフリーメーソンの支部で『後世の思ひ出の中の不滅について』(Über das Fortleben im Andenken der Nachwelt)る題する演説を行なった。

これは彼の人間としての、また政治的および文学的な遺書となるべきものであった。その中で彼は自分の生存の総まとめを次のように述べているからである。「真の人生とは、夢という名前にふさわしいものの中に存在するのであるうか。それともむしろ、われわれの精神のもっとも気高い力と、われわれの心情のもっとも美しい信念や感情の整然とした可能な限り連続した修練と応用の中にあるのではないだろうか。そのことによって精神と心情の両方とも、われわれの外にあるよきものを促進するという確固とした方向を保持するのである。いいかえれば、公共の福祉と人類の全般的な教育と改善の構成要素と見なしうるこのような活動（それがどんな種類のものであろうとかまわないが）への確固とした方向を保持するからである。心の気高い人間であればだれでも、自分自身のためよりも、他の人びとのために生きるものではないだろうか？」

(Besteht das wahre Leben in dem, weswegen es den Namen eines Traums verdient? Oder nicht vielmehr in wohlgeordneter, und, soviel möglich, ununterbrochener Übung und Anwendung der edelsten Kräfte unseres Geistes und der schönsten Gesinnung und Gefühle unseres Geistes, wodurch beide eine unverwandte Richtung auf die Beförderung des Guten außer uns, das ist auf solche Kraftäusserungen (von welcher Art sie auch sein mögen) erhalten, welche als Bestandteil des allgemeinen Wohls und allseitigen Ausbildung und Vervollkommenung der Menschheit anzusehen sind? Lebt nicht jeder edelgesinnte Mensch weniger für sich selbst als für andere?)

1813年1月10日の夜、ヴィーラントは突然卒中の発作に襲われた。孫のヴィルヘルミーネ・ショルヒトの手記によると、昼間はヴィーラントは元気で食欲もあり、子供達とトランプでボストンをやっていた。子供たちが去ったときに、胸の息苦しさを訴えたが、摩擦によって消えたように思われた。11時頃に服を脱がせたが、その際に途方もない悪寒に襲われ、足が座攀し、ほとんど口がきけなくなった。その後なお10日ほど昏睡状態にあったが、そのあいだ医者が希望を抱かせるように元気づけると、「生か死か、そんなことは今はわたしにはほとんどどうでもいいことだ」(Sein oder Nichtsein, das ist mir jetzt so ziemlich egal.) とハムレットの有名なモノローグのようなものをつぶやいたりしたが、1月20日の11時頃、もはや口をきくことができなくなり、心臓の鼓動も停止した。⁴⁴ 80歳という長寿の生涯であった。彼の希望に従って遺体は、オスマンシュテットの公園に妻のアンナ・ドロテアとゾフィー・ブレンターノの傍らに葬られた。墓碑銘はヴィーラント自身が書き下ろしたもので、次のようなものである。

愛と友情は、この世の相似かよった魂を結びつけた。

そしてかれらのはかなき命は、ここに合わさった墓石の下に眠る。

(Liebe und Freundschaft umschlang die verwandten Seelen im Leben,
Und ihr Sterbliches deckt dieser gemeinsame Stein.)

冒頭に述べたように、ヴィーラントは生存中は当時もっとも多く読まれた著者の一人であった。60歳の時に42巻にも及ぶ全集がライプツィのゲッセン出版社から発行されたことが、何よりもこのことを証明している。しかしながら今日では「読まれざる詩人」(der ungelese Dicter) になっている。そして例えば、スイスの劇作家デュレンマット (F. Dürrenmatt) (1921～) のように、ヴィーラントをひいきしている作家は、「奇妙なことに、私はヴィーラントが好きだった。私はかれについて一番多くのことを知っていると思う」などと弁解めいた言葉を語っている。⁴⁸⁾

しかしながらヴィーラントは、『ロサルバのドン・スィルビョの冒険』や『アーガトン物語』や『アブデラの人々』といったロマンの著者として文学史上にその名を留めるであろうし、また特に雑誌『デア・トイチェ・メルクーア』によって今日のいわゆるジャーナリズム活動によって政治的世論形成に力を尽くした功績も忘れることはできないであろう。前にも引用したゲーテの弔辞の言葉を借りれば、「ヴィーラントの読者への影響は、間断なく永続的なものであった。かれはかれの時代を造り上げ、同時代の人々の趣味や判断に決定的な方向を与えた。……そしてかれがドイツ人に及ぼした偉大な影響はどこからきたのであろうか。それはかれの人間の能力と偏見のなさの結果であった」のである。

注(1) Gerd Kaiser: Geschichte der deutschen Literatur von der Aufklärung bis zum Sturm und Drang 1966.

(2) 登張正実著『ドイツ教養小説の成立』による。

(3) Wielands Werke 第一巻 1969.

(4) W. Jahn: Zu Wielands „Don Sylvio“ H. Schelle: Christoph Martin Wieland 1981 所載。

(5) 『教養小説の展望』と諸相の中の柏原兵三「ドイツ教養小説の系譜」(三修社)による。

- (6) O. F. Best: Handbuch literarischer Fachbegriffe (1986) の Bildungsroman の項による。
- (7) W. Dilthey: Das Erlebnis und die Dichtung (192) 服部訳『体験と文学』による。
- (8) R. Selbmann: Der deutsche Bildungsroman 1984.
- (9) auktorial という言葉はラテン語の auctor (創始者, 創造者) からきたもので, 全知全能の話し手が創造者(Schöpfer, Urheber) としてその材料を無制限に意のままにする意味である。従って auktorialer Roman は personaler Roman および Ich-Roman に対するものである。
- (10) Norbert Miller: Der empfindsame Erzähler 1968.
- (11) Erläuterungen zur deutschen Literatur (Aufklärung) 1963, S. 529.
- (12) 全集第一巻 S. 29.
- (13) 光明会(Illuminatenorden) というのは哲学者ヴァイスハウプトが 1776 年に設立した秘密結社。
- (14) ばら十字会(Rosenkraz) というのはクリスティアン・ローゼンクロイツの名前から来た秘密組織で, 18世紀には, フリーメーソンやプロイセンの宮廷に強い影響力をもった。
- (15) アレサンドロ・カヨストロ(Alessandro Cagliostro) はイタリアの伯爵で, 交霊術や娯楽や錬金術などによって影響力をもったが, その後異端信仰によって死刑の判決を受け, 獄中で死亡。
- (16) メスマー(F. A. Mesmer) は, ドイツの医学者で, 動物磁気による一種の暗示療法であるメスメリズムを唱えた。
- (17) T. C. Starnes: Christoph Martin Wieland (Leben und Werk) Band 3.
- (18) Heinrich Bock 編 Wieland Lesebuch.

参考文献

- Wielands Werke in 4 Bänden 1969.
- T. C. Starnes: C. M. Wieland (Leben und Werk) 3 Bände 1987.
- H. Schelle 編: C. M. Wieland 1981.
- H. Bock 編: Wieland Lesebuch.
- K. Böttcher u. P. G. Krohn 編: Erläuterungen zur deutschen Literatur (Aufklärung). 1956.
- G. Kaiser: Geschichte der deutschen Literatur von der Aufklärung bis zum Sturm und Drang 9t66.
- Benno v. Wiese 編: Der deutsche Roman 1965.
- H. A. u. E. Frenzel: Abriß der deutschen Literaturgeschichte 1969.
- 登張正実著「ドイツ教養小説の成立」1965.
- しんせい会編「教養小説の展望と諸相」1978.